

大正十一年十月六日印刷 納本 大正十一年十月一日發行

金船社發行

Z32-B88

金の星

第四卷 十一月一號



国立国会
3.26
宮

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



就寫印ノコード

ニツポノホン



會商器音蓄本日 會社式

ゆーやけ こやけ
ひがくれる
うれちいこんやも
かーさまが
かけてくださる
蓄音器
あたちのちゆきな

飲 滋
料 強

カ
ル
ピ
ス



一 場	一 杯	一 滴
……	……	……
強 壯	爽 快	美 味

販賣所・酒店・食品店・藥店
製造元・東京ラクトー株式会社

少年少女の童話讀本

赤い猫

沖野岩三郎先生著

岡本輝一先生裝幀及挿畫

◇三五判函入類美本◇
◇本文二百五十頁餘◇
◇口繪三色版外挿畫四頁◇
◇定價金壹圓(送料六錢)◇

金の星出版部が一度、少年少女の童話讀本の出版廣告を掲げました。金の星の「愛讀者の方々をはじめ、各地の學校、圖書館、及び全國の多數の御家庭から驚くほど澤山の御申込みを受けました。係りの者が日々の御注文にまごついてをる有様でございます。これら以ても、此の書が如何に強い反響があつたか、知れました。

金の星出版部はこの記念すべき仕事の完成を期するために、引つづいて第二編「かくれ養」の印刷にも着手いたしました。十月中旬第一編「赤い猫」が発賣されると間もなく、この第二編も發賣になります。

沖野先生のお作は何れも實に面白いくものばかりで、そして又實に立派な教訓を含んだものばかりであります。今度、新たに書かれた苦心の長篇傑作「十人の大將」も、等一編の中に掲げられてあります。

十月月中旬いよく發賣

かぐれ

第二編

東京野下谷 振替部 出版の金の星 東京野下谷 振替部 出版の金の星

斯界の驚異、弊所は既に七週年紀念の途へ、日本未だに我が國業界屈指の製造商を有す。至り各位の甚大に御愛顧。始し品質優美、實用、甲乙無しの誠意を表す。今同業を擴張致し、近時流行の「シャープペンシル」の製造を開始。兼、暴利多量、奸商征伐、七週年祝賀を兼ね、百分の利益を度外視し、萬年筆購買者「シャープペンシル」一本宛無代進呈致す事、委託規定を并進呈品同人寫眞等御通知次第郵送す。此際當弊所の微衷な誠意を倍舊の御用命を願ふ。

▲エキストラ二二號 押出式又はムアー式(現圖通り)

大特價 金貳圓九拾五錢



▲エキストラ一三號 安全装置インク止式(正十四金ペン付)エポナイト軸機(能動裝飾純鋼軸)二ヶ付(軸徑三分六厘丸)

大特價 金壹圓八拾錢



▲エキストラ二號 安全装置インク止式(正十四金ペン付)エポナイト軸機(徑三分五厘丸)

大特價 金壹圓五拾錢



▲エキストラ一三號 安全装置インク止式(正十四金ペン付)エポナイト軸機(徑三分七厘丸)

大特價 金壹圓四拾錢

◆◆四拾餘種類目錄送呈(押出ムアー式)選轉自動吸入式(選出式)月狀形吸入式(安全装置インク止式)其他金銀付等弊所責任(如何なる制裁も受す)三、弊所販賣のエキストラ一三號年筆使用中故障若し自然破損を生じた時は無料修理提供す。天下の人氣エキストラ一萬年筆に集中(品質、位置、多量、主で頒布するので、年筆の人氣、時に集中したる。トランプ、加減法、若くは御紹介の類)エキストラ一萬年筆本舖(東京市小石川區原町一、二)電話小石川四四六番 明盛進堂製作所(本舖を見し御郵券を願) 萬年筆本舖

目次

また遇ひませう左様なら(表紙・原色版)……………岡本 歸一

牛若丸の舟(口輪・三色版)……………本居 長世

金の星の歌(歌曲・譜)……………二野口 雨情

書の月(童話)……………四 沖野岩三郎

金の釣瓶(童話)……………三 小島政二郎

ねこの島(童話)……………一 茅野 千代

鰻(幼年詩)……………三 岡本 歸一

王様の不思議な病氣(童話)……………二 霜田 史光

頼朝と義経の對面(史傳)……………一 窪田 空穂

家なき子(名作童話)……………三 三宅 房子

よちよち歩の良雄(童話)……………三 若山 牧水



油で煮られた王様の話(童話)……………五 内藤 豊雄

石臼の上臺のない村の話(童話)……………三 宮島 資夫

子供の唄(推薦童話)……………七 都外川 淳

織姫姊妹(傳説)……………三 藤澤 衛彦

猿のねがひ(童話)……………三 齋藤 佐次郎

金の星の歌(童話)……………三 野口 雨情

なすび(幼年詩)……………三 若山 牧水

有馬さん(綴り方)……………三 編 輯 部 選

グアイオリン(山山畫)……………三 山 本 鼎 選

金の星講演部報告……………三

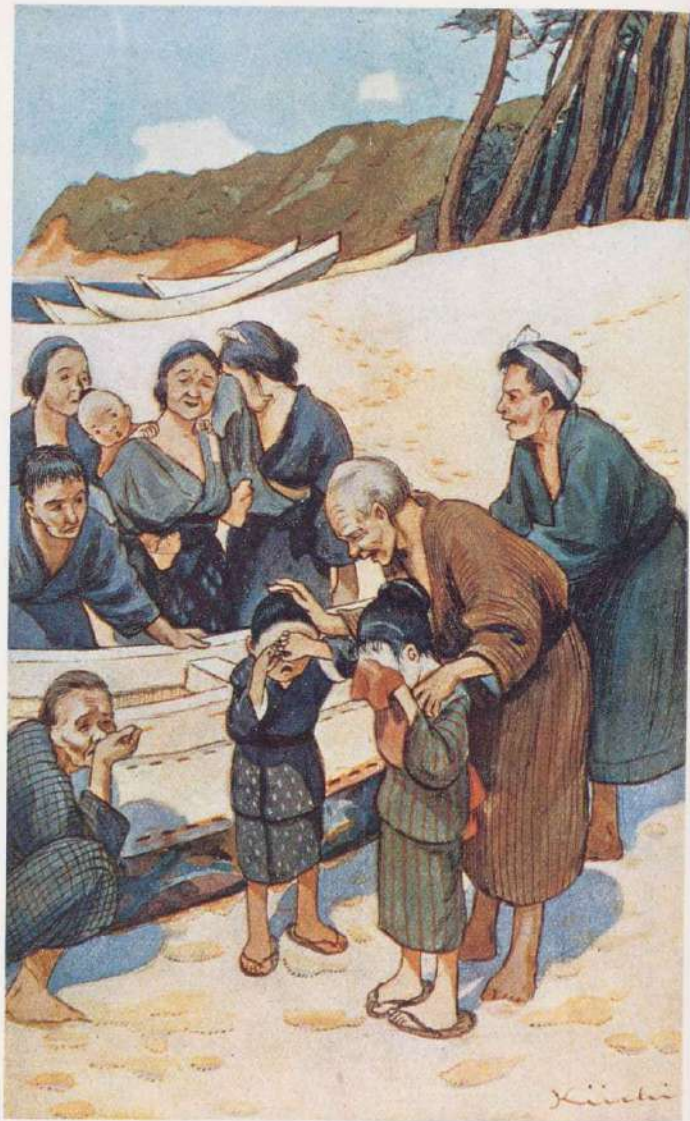
通 信……………三

(附 録)……………三

長篇物語 父戀し(第十四)……………沖野岩三郎

難破船……………





牛若丸の角

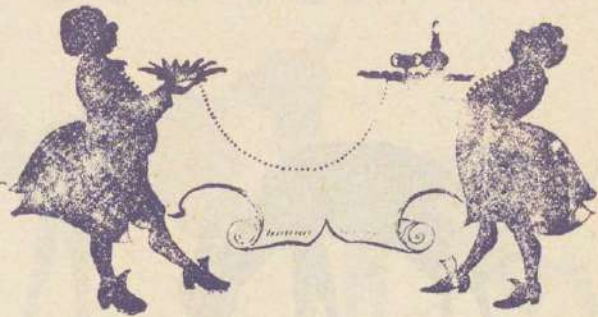
岡本歸一畫

その時、年の若い女が、
 「此の舟に商造さんが乗つてゐたんぢやなか
 らうか」と、言つてしまひました。

それを聞いた一同は、皆な一時に、明次と
 伊吹子との顔を見ました。

二人は今まで黙つてゐましたが、その言葉
 を聞くと同時に、もう堪らなくなつて、わあ
 ーツと聲をあけて泣き出しました。

(附録「父戀し」の一三五頁を御覽下さい)



少女詩の作り方

□ 届切にならぬ内早く御注文なさるやう御すゝめします

今度出来ました『少女詩の作り方』は年若い皆様の爲に特に水谷まさる先生が『どっしたら佳い詩が出来るか』との問ひに對して極めて判り易く新しい詩の作り方を、やさしく書かれたのですから、必ず讀めば上手になることが出来るとの評判です。發行所は東京神田區仲猿樂町十七交蘭社です。定價は金八十錢送料が十一錢振替が東京四〇二七九番

□ 全部假名付でよく判ります

◎誌雜究研術藝童兒の一唯邦本◎

童話研究

目要號刊創

目要號貳第

募會員

●話方の根本原則 (松美) ●科學的童話に就て (能澤)
●イツツプ物語 (廣谷) ●童謡舞踊劇批評 (清水)

●童話研究の三方面
●童話に現れたる民族性
●日本童話史資料
●歐米の童話教育

●西洋古代民族の謎 (田中)
●道づれ (童話劇) (餘正一 脚色)
●アンダーゼン評傳 (廣谷)

●童話劇と童謡踊 (岸邊)
●歐羅巴の謎の變遷 (田中)
●家庭傳説論 (藤浪樂齋)

●アスビョルンゼンとその事業 (蘆谷 重常)
●童謡に關する教育實際上の諸問題 (葛原 齒)

●教育的立場より見たる兒童藝術 (野々村運市)
●嚴谷、久留島、岸邊三氏の話方 (松美 佐雄)

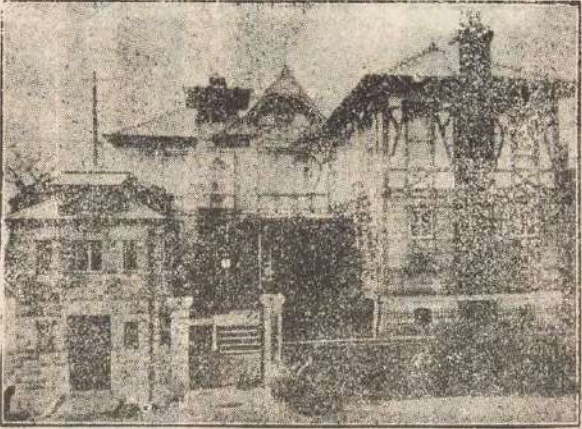
●故竹貫佳水氏の事業 (蘆谷 重常)
●大井冷光氏を憶ふ (中條 實)
●童話研究其他一般兒童藝術の研究改善普及に熱心なる同志の士を募る ●特別會員會費毎月金壹圓 ●通常會員半年分前金會費壹圓八拾錢 同壹個年分金參圓五拾錢 ●會員には隔月一回雜誌童話研究を配本す ●毎月講演會及研究會開催 ●見本として本誌入用の方には特に一部五拾錢にて送本す

天下の青年は 何故に争ふて 大日本國民中學會に入會する乎

- 講義が新しいから
- 會費が安いから
- 指導が良いいから
- 學制が正しいから
- 基礎が固いから
- 講師が善いから
- 卒業が早いから
- 成功が速いから

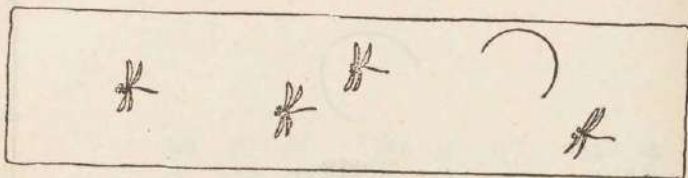
會長 尾崎 行雄
學監 文學博士 山内 素吉
顧問 新渡戸 洋三 博士 田中 健士
顧問 井上 三郎 博士 田中 健士
顧問 岡田 文務 大臣

◎創立 以二十一年 記念大特典提供
目下新學期開講 入會の絶好機



一人前の男となるには
さうしても中教育を受けなければいけない。中等教育の学力のない者はさうしても生半端な勝利者たることはバケしい。併し家庭の事情で中學に入れない者も決して失望するには及ばない。中學校に行かずに中學卒業同様の學問をする方法がチャンス出来てゐる。それは創立以來二十年の古い経験 ある成績で有名な大日本國民 學會の通信教授法にある。
東京 河邊 龍茶の水電車通り)
大日本國民中學會
振替東京四二〇〇 電話 神田三〇〇三
神田三〇〇三

東京府下町 東原一三番地 日本童話協會 振替東京九九〇六



金の星の歌

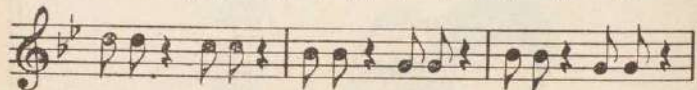
本居長世作曲

活潑に



||: 5̣. 6̣ 5̣- | 3̣ 5̣ 1̣. 1̣ | 2̣. 3̣ 2̣ 1̣ 6̣ 1̣ | 2̣- 0̣ |

あけの みろしろう きんのほし
よひの みろじょう きんのほし



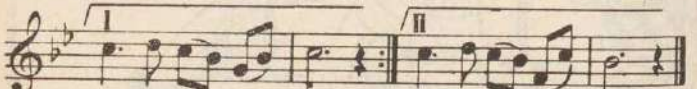
3̣ 3̣ 0̣ 2̣ 2̣ 0̣ | 1̣ 1̣ 0̣ 6̣ 6̣ 0̣ | 1̣ 1̣ 0̣ 6̣ 6̣ 0̣ |

ピカ ピカ ピカ ピカ ピカ ピカ
ピカ ピカ ピカ ピカ ピカ ピカ



5̣ 6̣ 6̣ 5̣ 0̣ | 1̣. 2̣ 3̣ 4̣ | 5̣. 6̣ 5̣ 1̣ |

ピッカリコ ほ う ねんよ こ こ し は
ピッカリコ た い れふよ こ こ し は



2̣. 3̣ 2̣ 1̣ 6̣ 1̣ | 2̣- 0̣ || 2̣. 3̣ 2̣ 1̣ 5̣ 2̣ | 1̣- 0̣ ||

は う ね ん よ た い れ ふ よ

金の星童謡曲譜集

本居長世先生作曲

野口雨情先生作
岡本歸一先生装幀

人買ひ船

内容 人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん

新刊 第一輯

一つお星さん

内容 一つお星さん、七つの子、鼯と雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬

新刊 第二輯

青い空

内容 青い空、つばめ、でんく虫、雁來紅、呼子鳥、雀の酒盛り

近刊 第三輯

發行所

東京下谷上野
公園前三橋傍

金の星出版部
電話東京六八二七〇一番
下谷六八二二三番

大取次書店

東京市外
下目黒四七八

白眉出版社
電話東京五四五九八番

◇菊判型上等和紙
◇表紙木版七度刷
◇本文色刷十四頁
◇定價各册六拾錢
(送料四錢)

お月さん
子供の
夢みてる
片われ
お月さん
晝の月
かはい
子供の
夢みてる



晝の月

野口雨情

白い
お月さん
晝の月



金の釣瓶

沖野岩三郎

朝鮮の新義州と、支那の安東との間を流れてゐる鴨綠江を、すん／＼と奥の方へ沂つて行くと、そこに大きな高い山があります。

この山には八つの名前があります。けれども長白山といふ名と、白頭山といふ名が一番多くの人達に知られてゐます。昔、昔、その昔の事です。その白頭山の麓に一人の若者が住んでゐました。



或日その若者は白頭山の奥深く分け入つて、一生懸命に薪を研つてゐました。するとそこへ一匹の鹿といふ鹿によく似た鹿が駆けて来て、

「もし／＼、總角さん、私を助けて下さい。恐ろしい獵夫が、私の後を追つかけて來ますから……」と申しました。總角といふのは朝鮮語の青年といふ事です。

それを聞いた若者は、確を可哀さうだと思つたので、すぐ自分の斫倒した樹の枝の中に隠してやりました。

暫くすると一人の獵人が走つて来て、
「もし／＼、總角さん、今こゝへ大きな鹿が逃げて來なかつたですか」と尋ねました。すると若者は、
「あゝ、來ましたけれどもそれは谷を渡つて、あの向ふの丘の方へ逃げましたよ。」と答へました。

「さうですか、あの丘の方へ行きましたか。有難う。」
獵夫はさう言つて、谷を渡つて丘の方へ走つて行きました。獵夫の影が見えなくなつたので、若者は枝を取除けて、

「さあ出ておいで、もう大丈夫だよ。」と申しました。すると確は、頭を何度も／＼下けて、

「有難うございました、有難うございました。」とお禮を申しました。若者は大層善い事をしたやうに思つたので、嬉しさに、にこ／＼笑ひ乍ら、

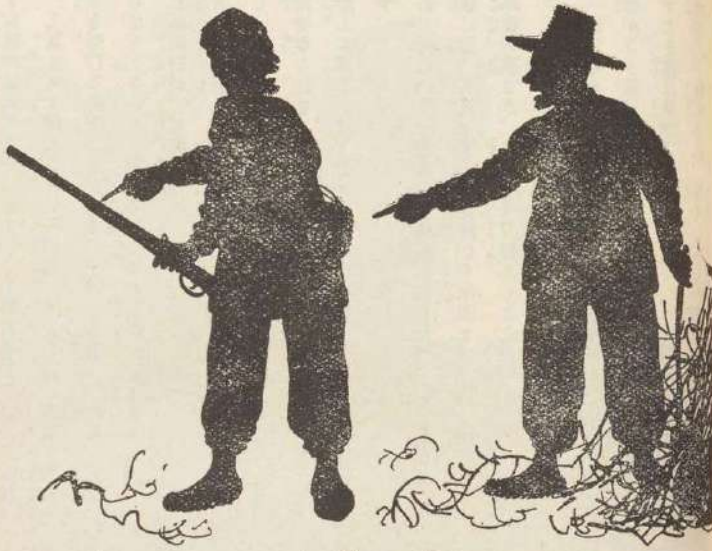
「確さん早くお歸り、お家では奥様や、坊っちゃんや、あなたのお歸りを待つてゐませうから。」と申しました。それを聞いた確は、急に涙をほろ／＼とほしながら、

「本當に有難うございました。私には二人の子供があります。子供達は母親と一緒に、こゝから三里ばかり向ふの湖水の傍に住んで居ります。總角さん、誠に濟みませんが、これから私と一緒にその湖水の傍までお出で下さいませんか。」と申しました。

「湖水？ それは何といふ湖水ですか？」
「それは龍王潭とも天池とも申します。」

「その龍王潭には、どんな魚が棲んでゐますか。」
「魚も居ます。水鳥も遊んでゐます。所が、魚よりも、水鳥よりも、もつと／＼面白いものが居ます。」

「さうか、それは、どんな者ですか？」
「總角さん、それは天女ですよ。龍王潭の上には開天弘聖帝





と申す神様が居らつしやいます。その開天弘聖帝様の、お傍に事へて居る天女達が、毎日一回宛、天から降りて来て龍王潭で水を浴びるのでございます。これから私と一緒に、私の家へお出で下さいまし、その天女をお目にかけてますから。」

「それは面白い、是非見せて下さい。」
 若者は大層喜んで、斧を肩掛けて嶺の後について行きました。険しい巖角を攀ち登つたり、樹の根に縋つたりして、三里の山路を登り詰めると、その頂上には、周圍三里ばかりの、卵の形した美しい湖水がありました。それを見た若者は、思はず、

「まあ、美しい」と言つて感嘆しました。で、走り寄つて、岸の巖に登つて見ますと、足許から水面まで、飽で削つたやうな絶壁の高さが、凡そ一千尺程ありました。

「璋さん、璋さん。何と美しい湖水ですネ。けれどもこの水の中へ跳び込むと、それつきり出られませんか。」

若者がさう言ひました時、俄かに空がキラ／＼と光りました。すると璋は周章で、

の蔭に隠れて居るんですよ。」と言ひました。で、若者は巖の蔭に身を潜めて居ますと、湖水の直ぐ上の天から、美しい美しい五色の雲が、ふわり／＼と舞ひ下つて来るのでした。

「御覽なさい、あの雲の中に三人の天女が居ますよ。」と璋は囁きました。
 五色の雲は纏つて湖水の上一面に擴がりました。そしてまた段々／＼高く天へ舞上つたと思ふと、東の岸の上に、綺麗な綺麗な天女が三人立つてゐました。

「御覽なさい、今にあの天女達は水泳ぎを致しますから。」
 璋は小さい／＼聲で言ひました。若者は息を殺して呆れ返り乍ら見て居ますと、天女は雲のやうな眞白い羽衣を巖の上に疊んで置いて、千尺の高い絶壁から、さんぶ、さんぶと淵の中に跳り込みました。

鏡のやうな水面は、俄かに白銀の波を起して、眩しいやうに輝きました。天女達の波に濁る黒い髪が美しく見えました。凝然と水面を見詰めてゐた若者が、不圖氣づいて振り返つてみると、今まで自分の傍に居た璋の姿が見えませんが、何うしたのか知らず、と思つて居るうちに、璋は眞白い天女の羽衣

を一枚口に銜へて来ました。

「おい、そんなものを何うするんだい。」
若者は驚いて訊きました。すると璋は若者の耳の傍へ口を寄せて、大事の大事の秘密を告げました。

若者は餘り嬉しかつたので、思はず手を拍き乍ら、
「さうか、有難う！」と大聲で言ひました。

人間の叫ぶ聲を聞いた天女達は、吃驚して、周章て乍ら水の中から眞白い手を高くあげて、雲を招きました。
見る／＼五色の雲は天から舞ひ降りました。そして再び天へ舞ひ上つた後に、一人の天女は巖の上で、

「私の羽衣、私の羽衣……」と言つて泣いてゐました。
それを見た若者は、璋の銜へて来た天女の羽衣を懐の中へ隠しながら近寄つて、

「その羽衣の在る所は私が知つてゐますよ。」と言ひました。
天女は大變喜んで、若者の袖に縋り乍ら、
「その羽衣の在所を教へて下さるなら、私はあなたの奥様に
なつて、御飯を炊いてあげます。お洗濯もしてあげます。」と
申しました。



「では、私の奥様になつて下さい。羽衣はあなたに見付けて出して上げるから。」

若者は、さう言つて、美しい／＼天女と一緒に璋の家に出して行きました。

天女は、毎日／＼、若者に對つて、羽衣の在所を訊きました。けれども若者は、天女の知らない所へそれを隠して置いて、どんなに頼んでも見せませんでした。
所が三年四年と経つうちに、天女は玉のやうな男の子を一人産みました。子供達は、天女をおつ母さん、おつ母さんと言つて大變慕ひました。村の人達も子供達のおつ母さんを天女だと知つて居るものはありませんでした。

もう二人の子供も出来たんだから、天女も地に馴れてしまつて、開天弘聖帝の所へ歸らうとは思はないだらうと思つて、或日の事、その羽衣を取出して、奥様の天女に見せました。
「あ、これは私の羽衣ですね。有難うございました。」と云つて、天女はそれを身に纏つたと思ふと、二人の子供を兩腕に抱へて、すう／＼と天へ舞登りました。

「もし／＼天女さん、どうぞ、いつまでも私の所に居て下さい……その子供だけでも置いて下さい……」

若者は叫びました。けれども天女は五色の雲を招いて、それに乗つて、白頭の空高く舞登つてしまひました。

で、若者は泣き乍ら白頭山の上に行つて、璋にその理由を話しますと、璋は、
「總角さん、あなたは私の言ふ事を守らないからです。子供さんが三人産れるまで、羽衣を出してはならないと教へて上げたぢやありませんか。二人の子供なら兩腕へ抱へて行れま

すが、三人だつたら一人だけ残して行かねばならないから、天女は羽衣を着ても、天へ歸らないのでした。」と叱るやうに言ひました。

「若者は何度も何度も頭を下けて、

「籬さん、私が悪うございました。私はあなたに謝ります。だからどうぞ、私をあの手まで行かれるやうにして下さい。天へ登る方法を教へて下さい。」と涙を流しながら頼みました。

丁度その時でした。天からキラ／＼と光る物が湖水の中へ落ちて来ました。それを見た籬は、

「籬角さん、籬角さん、御覽なさい。あれは天の上の開天弘聖帝のお使ひになる、水を汲む爲に、天から降り下して来た



「左様なら籬さん、奥様と、三正の子供さんをお大事に……」若者の聲は、雲の上から微かに聞えました。籬の奥様も、三正の子供も、岸の所へ出て来て天を見てゐました。

その時、籬のお父さまは、

「目出たい、目出度い。天では二人の坊つちやん達が、籬角さん待つて居るに違ひない。天女も屹度、開天弘聖帝様のお許しを得て、籬角の本當の奥様になるに違ひない。さうするとあの籬角は、今日から立派な神様の家来になるんだ。も

金の釣瓶ですよ。あなたと私とが天女の羽衣を奪つたもんだから、それからといふものは、天女はちつともこの湖水へ降りて来ません。その代り、毎日あの金の釣瓶があい通り釣り下けられます。あなたは今早くこの湖水へ跳び込みなさい。そしてあの釣瓶の中へお入りなさい。さうすれば奥様にも坊つちやまにも會はれます。」と言ひました。

それを聞いた若者は、物をも言はずに、そのまゝさんぶと湖水に跳び込みました。そして金の釣瓶の所へ泳ぎ着いて、その中へ入りますと、間もなく釣瓶は高く／＼天へ引揚がられました。

「籬角さん、御機嫌よう」と籬は、空を見上げながら言ひました。

う籬角ぢやない。偉い大人だよ。あの人は、私の生命を助けた爲に、天へ昇る事が出来たんだ。目出度い、目出度い。」と、申しました。

籬の奥様も、三正の坊つちやん達も、一度に、
「籬角さん、お目出度う！」
と、申しました。

を は り

(日本の三保の松原の羽女のお話は、このお話を作り替へたものでせう)



島のこね 小島政二郎

むかし、加賀の國に仲のよい漁夫が七人ゐりました。お魚を釣りに行くにも、仕事を休んで遊ぶにも、しじゆう七人が一しよになつてゐました。七人とも、漁夫のくせに、弓や矢や刀などが好きで、海へ行くにも舟の中まで持つて行きました。

或日のこと、いつものやうに七人で一つ舟に乗つて、釣りに出かけました。もう陸地が見えないくらゐ遠い沖へ出て、いよく釣りを垂れようとした時、ふいに風が吹き出して波が荒くなりました。舟はどんく沖へ流されて行きました。船も利かず、七人は仕方がなしに、風のまにまに流されるところまで流されるより外に仕方がないと覺悟を極めて、舟の中に坐つたまゝ、たゞ神さま佛さまを祈つてゐました。しかし、風は少しもやまず、波は少しも静まりませんでした。七人はこのまゝ死ぬのかと思ふと、たまらなくなつてみんな聲を揃へて泣き悲しみました。

その時、ふと氣がついて見ると、やゝ離れた沖の方に、一つの大きな島が浮かんでゐました。

「あ、島がある。」と、七人のうちの一人が叫ぶと、今まで舟の中に突き伏して泣いてゐた六人とも、一時に頭を擡げて、

「あゝ、やつぱり人の住んでゐる島であつた。」と、嬉しく思ひました。

その男は、かたまつて立つてゐる一同のそばへ寄つて来て、「あなた方の舟がこゝへ来たのは、私がお迎へ申したのだといふことを御存じですか。」と尋ねました。一同は不思議に思つて、

「いゝえ、釣りをしようとしてゐると、俄に風が吹き出して流されてゐるうちに、この島を見つけてこゝへ漕ぎ寄せたのです。」

「その風といふのは、實は私が吹かせたのです。それは兎も角も、お腹がすいたでせう。」と云ひながら、自分の出て来た方を振り向いて、

「おうい、用意したものを持つておいで。」と命じました。これ聞いた一同は、これは當りまへの人間ではないのだなと思ひました。

その間に、木々の茂みの奥から足音が聞えて来たかと思ふと、四五人の男が長櫃を二つ荷つて出て来ました。一人の男は、酒の瓶を肩にかついで持つて来ました。その長櫃と酒の

「やあ、島ぢや、島ぢや。」と、喜び合ひました。「さ、力の限り漕いで、あの島へ舟を附ける。」と、一同は氣を揃へて、上げておいた櫓をおろすが早いか、えつさ、えつさ、と漕ぎ始めました。すると、不思議なことに、舟は漕ぐよりも早く、誰かゝ引き寄せてくれるやうに、瞬く間にその島へ無事に着きました。

「やれ、嬉しや、これで命だけは助かつたぞ。」と一人が喜べば、

「しかし、ついで見慣れぬ島ぢや。人を食ふ悪い獸がゐるとも限らぬ。滅多に島へ下りまいぞ。」と心配するものもありました

で、一同は舟の中から、暫く島の様子を窺つてゐましたが、別に悪い獸も住んでゐるさうな様子もありませんでした。きれいな水がちよろ／＼流れてゐたり、旨さうな木の實がふさふさと生つてゐるのを見ると、もう我慢が出来なくなつて、とう／＼舟から出て島へ上りました。

すると、ふさ／＼と茂つた木々の間から、二十を幾らか越えたきれいな男が歩み出て来ました。これを見た一同は

瓶とを、二十を越えたきれいな男の前へ昇き据ゑると、下部どもは一禮をしてまた木々の茂みの奥へ歸つて行つてしまひました。

「さ、なんにも御馳走はありませんが、これでも食べてお腹をこしらへて下さい。」

かう云つて、そのきれいな男が長櫃の蓋をはねると、中にはいろんとお美しさうな御馳走が並んでゐました。一同はお腹がすいてゐましたから、遠慮せずにお酒を飲み御料理を食べました。



「ねえ、皆さん、私があなた方の舟をこへお迎へ申したといふのは、實は、この島よりもつと沖にもう一つ島があるのです。その島の主が、私を殺してこの島をも自分のものにして下さい。」

「よろしい。さういふ譯なら、喜んでお加勢いたしませう。しかし、その相手といふのは、一たいどのくらゐ兵隊をつれて

しようと思つて、これまでも、幾度来て私と戦ひをしたか知れません。その度に、私は追ひ返してゐました。ところが、明日も來るのです。しかも、明日は、いよくどつちか死ぬか生きるかの大戦争をしなければならぬのです。それで是非あなたの方の力をお借りしたいと思つて、わざ／＼風を起してお迎へ申した譯なのです。どうか加勢を

てやつて來るのですか。何處ぐらゐの船で攻めて來るのですか。」

「ところが、その相手といふのは人間ではないのです。かく云ふ私も、實は人間ではないのです。まあ、明日御覽になれば分りますが……。敵はこの方面からやつて來て島へ上らうとします。私は上らせまいとして島の奥からおりて來て戦ひます。これまでは、今あなた方が坐つてゐる海岸で戦ふのが例でしたが、明日はあなた方といふ味方のゐるのを幸ひ、あすこの……。」と、うしろを指さして「……瀧の邊まで相手を上らせて見ようと思ひます。陸へ上れば、敵は力を得ますから、喜んで上つて來ると思ひます。暫くの間は私一人にお任せ置き下さい。いよく叶はなくなつたら、私があなたの方を見ますから、さうしたら一時に、矢のある限り射して下さい。明日はちやうど午前十時頃に戦ひますから、朝のうちには食物をどつさり食べて用意をして下さい。では、あなた方は、あの瀧の上に張り出してゐる岩の上にて下さい。敵はこの道から陸へ上つて來ますから……。」

かう云つて、明日のことまでよく頼んだあとで、森の奥へ

はひつて行きました。

七人の漁夫どもは、敵へられた岩の上のほつて、あたりの木を切つて、小屋を作つて、それ／＼明日の戦争の用意をしました。矢の尻を研いだり、弓の弦を張つたり、刀の切れ味を試したりしました。さうかうするうちに、夜になつたので、小屋の前に火を焚いて、いろんな話をしながら、その夜は眠らずに明かしました。

二

やがて午前十時近くになりました。すると、生暖かい風が海の方から吹き起つて來ました。見ると、海の上が暗く物濃くなつたかと思ふと大波が起つて、その大波の中から、大きな火が二つ燃えながら岸の方へ進んで來ました。

振り返つて山の方を見ると、そこにも薄氣味の悪い風が吹き起つて、草は躑躅木の葉はざわ／＼と燃え近づいて來ました。同じやうな火が二つらん／＼と燃え近づいて來ました。

間もなく、どつといふ風と一しよに、沖から二つの火が岸に近づいたのを見ると、それは十丈もあらうといふ大百足でした。脊中は眞黒に光り、横腹は赤く光つてゐました。



一六
上を見ると、これも同じ長さの大蛇でした。舌をべろッ
べろッと吐き出しながら、瀧の上あたりまで滑りおりて
来ました。

昨日きれいな男が話したやうに、蛇は瀧のあたりに踏
みとまつたまゝ、首をぬつと擡けて敵を待つてゐまし
た。百足は喜んで、海から跳ね上ると同時に、するく
と這ひ上つて行きました。二匹は面と向ひ合つたまゝ、
目を睨らして睨み合ひました。七人の漁夫たちは、云は
れた通りに、瀧の上に張り出したやうになつてゐる岩の
上に立つて、弓に矢をつがへたなり、蛇の様子にちつと
目を注いでゐました。

百足の方から進んで走り寄つて行つたかと思ふと、忽
ちのうちに、噛み合ひを始めました。互にひし／＼と噛
み合つてゐるうちに、両方とも血を流して體ぢゆう眞赤
になりました。百足は手が澤山ありますから、かちりつ
いては噛むのが上手でした。

かうして二匹は二時間あまりも噛み合つてゐました
が、そのうちに、蛇の方が負け色立つて見えました。蛇は

急いで眞赤な目を漁夫の方へ向けました。待ちかまへてゐた
七人は、一せいに矢を放つて百足を射まし。百足の頭から尻
尾まで、刺さつた矢で埋まつてしまひました。それでもまだ
蛇にかちりついたまゝ、離れないので、七人は太刀を抜いて手
を一本一本みんな切り落してしまひました。流石の百足もば
つたり倒れて息が絶えました。

それを見た蛇は、喜び勇んで森の奥へ走り入りました。し
ばらく立つと、昨日の男が跋を引きながら出て来ました。顔
も血だらけになつて、見るから苦しさうな様子をしてゐまし
た。それにもかゝはらず、いろ／＼の御馳走やお酒を持つて
来て、漁夫に食べさせなどして、喜ぶこと限りありませんで
した。七人は尙も百足の體をズタ／＼に切つて、山の木をそ
の上に積み重ねて火をつけて焼いてしまひました。

さて、島の主は七人に向つて、
「あなた方のお蔭で、私はこれから先き無事にこの島を治め
て行くことが出来ます。嬉しさは言葉で云ひあらはすことが
出来ません。この島には田に作るとよろしい土地が随分あり
ます。島に向く地も限りありません。果物の生る木も数へ切

れない程あります。人間の住むのにこれほどいゝ土地はある
まいと思ひますが、この島に住む氣はありませんか。」

「無論よこんで住みますが、本土にゐる妻や子供をどうし
たらいいでせう。」

「迎へに行つて入らつしやい。」

「しかし、この島と本土とは非常に遠いし、私たちには本土
の方角さへ分らないから迎へに行きたくとも行けません。」

「なあに、そんなことは譯はありません。こつちから本土へ
行く時には、私が風を起して吹き送つてあげます。本土から
こつちへ来るには、加賀の國の熊田の宮と申す社へお願ひす
れば、造作なく吹きかへしてくれます。熊田の宮は私の弟
ですよ。」

そこで、七人の者は舟の用意をして、舟には、途中で食べ
るものをどつき入れて、いよく舟に乗り込みました。す
ると、俄に島から風が吹き起つて、またたくうちに、本土へ
着きました。おの／＼の家へ歸つて見ると、死んだとばかり
思つてゐたお父さんたちが歸つて来たのですから、お母さん
や子供たちは喜んで迎へました。七人が詳しく島の様子を話

すと、みんな一しよに行きたいといふので、今度は七艘の舟を用意して、いろんな道具のほかに、田島へ行くの種まで舟に積み込みました。かうしておいて、一同で熊田の宮へまゐつて、さて舟に乗り込んで待つてみると、間もなくそよ／＼と追手の風が吹き出して、一夜のうちに元の島へ歸り着きました。

七人の家族のものは、一生懸命に田を働き島を耕すにつれて、實によくのりました。人の数もだん／＼にふえて行きました。その子孫はいまだにその島に榮えてゐるさうです。島の名を「猫の島」といふと聞きました。

島人は、年に一度づつ加賀の國に渡つて、熊田の宮でお祭りをして行くさうです。その話を聞いた加賀の人たちはどうかして、島の人を見たいと思つて、毎年々々待ちかまへてゐますが、まだ一度も見たいことはないさうです。思ひも寄らぬ夜中などに來て、お祭りをして歸つて行つてしまふので、いつもあとで氣がつくのだといふことです。このお祭りもいまだに續いて行はれてゐると聞きました。島は、能登の國の羽咋郡天宮といふ海岸に立つと、よく見えるといふことで

す。晴れた日には、青みわたつて見えるさうです。

いつでしたか、能登の國の常光といふ漁夫が暴風に逢つて、この島に吹き寄せられたことがありした。すると、島の人が大ぜい海岸へ出て來て、舟を岸へつなげて食物や水などをくれましたが、どうしても島へは上げてくれなかつたさうです。さうして七八日ばかり待つてゐるうちに、暴風が靜まつて追風が吹き出したので、無事に能登の國へ歸つて來ることが出来ました。その常光の語るところによると、

「島へ上つて見た譯ではありませんからよくは分りませんが、人家が随分重なり合つてゐました。往來は、話に聞いた京都のやうに、碁盤の目のやうになつてゐて、ぞろ／＼人が行き來をしてゐました。」とのことでした。

恐く島へ上げなかつたといふのは、島の様子を本土の人に見せまいと思つてせう。今でも、支那あたりから來る船はまづこの島に寄つて、食物や鮑などを買つて、それから敦賀へ來るといふ話です。さういふ支那人たちにも、かういふ島があると人に話してくれるなと頼むさうです。なんでも非常に楽しい島だといふことです。(なほり)

なみ

(幼年詩)

大阪府泉南郡谷川 校尋三

戸口 克巳

ゆら／＼するなみは

をかでは

いはにあたつて

あわをふき

おきでは

ゆらく／＼ゆすれる

鯉子屋さん

(幼年詩)

山梨縣北巨磨郡篠尾 校尋五

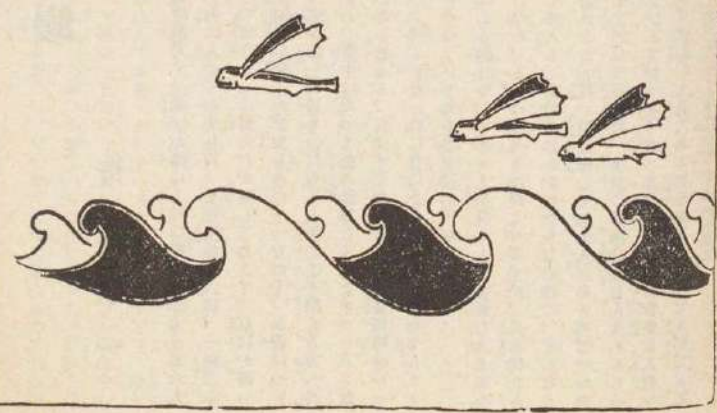
茅野 千代

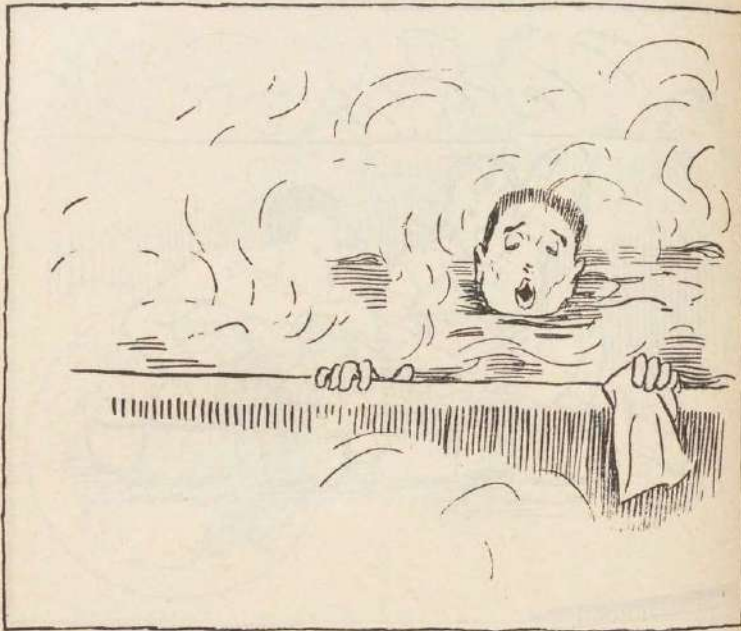
鯉子屋さんが通る

い／＼——い／＼

青空へ

つき通るやうだ





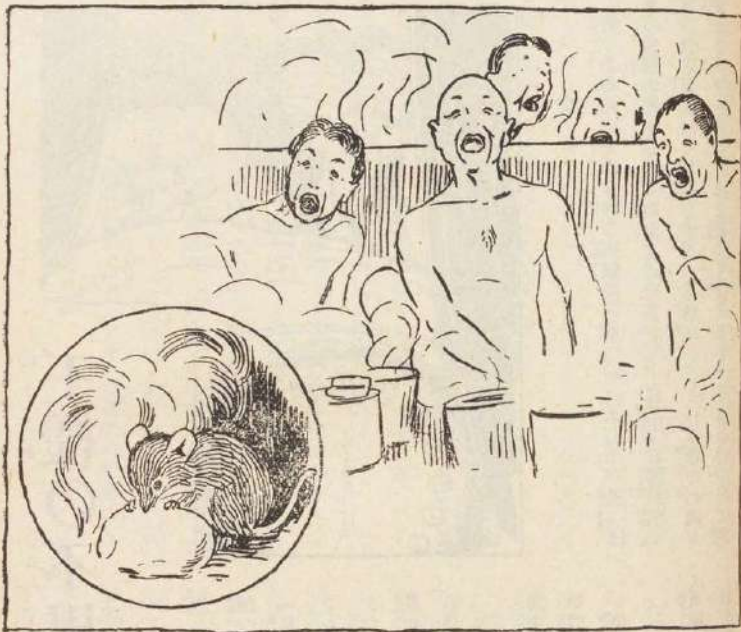
話は驚く面白くなって、釣獲を眺ふことなどはとつづくの前に忘れて、身ぶりや手ぶりまでしてゐる。其話といふのは、まあ大體こんな事でした。
 或日釣に出かけたが、其日にかぎつて一向釣れず、夕方になつても僅かに小さなのが三四匹しかとれなかつたので、少しややくそになつて何か大きな奴でもかゝらなければ夜になつても歸るものかと、お腹がすいて來ますけれど、強情にも動かないでゐますと、其中に何處かへ鉤が引つかまつつて了つて如何してもとれません。仕方なしに水の中へ入つて、漸く鉤をはづしたが、今度は岸の方がすべつてなかく上れないので其處らを見廻すと、牛町ばかり川下に繩が出てゐるので、あそこから上らうと傍まで歩いて行きますと、足へねりりと當るものがあるので、氣味が悪くなつて來たがよく見ると、それが鰻だつたんださうです。
 何んでも其繩は、何處かの池の水をかい出して川へ落してゐるので、水にこりますから鰻が皆繩を傳つて川へ流れ込んで其處へかたまつてゐるのださうです。話が此處まで來ました時に、一人の職人風の人がお湯の中へ入つて來ましたが、やがていゝ氣持になると、自慢さうに頭をうたひ出して、せつかくの話を腰を折つてしまひました。



鰻

舟橋重一

或日の事です。私がお湯に入りに行くとも、もう五六人私より先に入つてゐました。その中の三人は、一所懸命になつて面白さうに何んだか話してゐます。私はお湯へ來て世間話を聞くのが楽しみなので、お湯につかり乍ら何を話して居るのだらうと話のよく聞える方へ行きますと、夢中になつて釣の話をしてゐます。ハハア釣の話だと思ふと、私はすぐ心に日がな一日何時喰ひつくかわかりもしないのに目にかん／＼照らされ乍らウキとにらめっこしてゐる姿が浮んで來ました。
 私はよく釣りをしてゐる人を見ると、呑氣な人もあるもんだなあ、と思つて見るのがくせですが、又其後から二人も三人も、何時釣れるかわからないのに、どんなものが釣れるかと長い間見物してゐる人があるので、おやおや此方がなほ呑氣だ、世間には随分暇な人もあるものだと思ひますが、さて考へて見ますと、其呑氣な人達をぼんやり感心して見てゐる自分が一番呑氣な人間だと氣がつくと、こそ／＼逃げて來るのです。



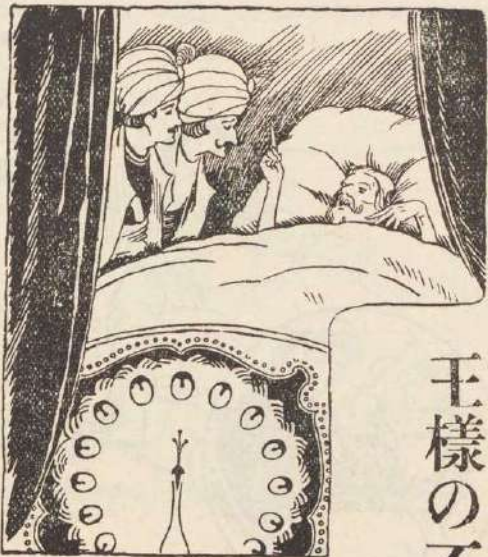
「さあ大驚、今度は誰なぞ何處へやら、溝の中へ手を突込みました。其
 恐んでとらうとしてゐますが、溝は狭いし手は太くて十
 分入らない。シャボンばすべし、中々とれず幾度もや
 りそこなつてゐるうちに、溝のはづれの二三寸手前の所
 まで来てしまひました。」
 私は可笑しくつて耐らないのですが、やつと奥歯をか
 みしめて我慢してゐました。すると、話の相手が『まだ
 捕れませんかね。』と聞きますと『えゝやつと此處でおま
 へてゐるのですが、何しろぬる／＼と逃げるのでねえ。』
 と答へました。
 其時です。例の皿をうなつてゐた職人が、いきなり伊
 で草魚よろしくといふやうに眞赤になつて飛び上つて來
 ますと、いきなり
 『なに鱧だ。』といひ乍ら溝の中へ手を突込みました。其
 拍子にシャボンばつるりと外の溝へと落ちてしまひまし
 た。シャボンの落し主は『あゝと／＼落ちちやつた。
 シャボンだよ。鱧が錢湯に居るものかい。』とどん／＼し
 てゐますと、職人も『なんださうか。俺も鱧だと思つた
 んだが、さつきから鱧だ鱧だと云つてゐし、此處で押へ
 てゐるが、ぬるり／＼すると云ふから、てつきり鱧だ
 と思つたんだ。』と云ひましたので、皆どつと大笑ひ。職
 人もシャボンを落した人まで大笑ひ。



私は話のつゞきを聞きたいので、お湯から出て其人達
 のそばへ陣取りました。
 『だからあなた釣りは止められませぬよ。實際私もうれ
 しくなつてしまひましたよ。何んしろ籠に三杯もとつて
 しまひましてね。持つて歸るのに困つてしまひました。
 重くつて、重くつて、翌日一日肩がこつてしまつた位で
 す。』と、私がそばへ行つた事も気がつかずにしやべつて
 ゐます。
 相手の人は羨しそうに『へえ、そんなにとれたのです
 か。私も随分長い間出掛けてゐますが、まだそんな旨い
 事は只の一度も出会ひませぬよ。だが其中には素敵に太
 いのもあつたでせうね。』と申しますと、やつと気がつい
 て洗ひかけてゐた手をまた止めて、
 『それは太いのもありますぜ。一番大きい奴はこんな奴
 です。』と親指と人さし指で輪をこしらへた所を見ると指
 太ぐらゐもありました。だがそれよりか、そいつをつか
 まへるのが大變で、ぬるり／＼する奴をかういふ工合に
 ぎゅつと……』と、云ひ乍らシャボンで握む眞似をする
 拍子に、シャボンが／＼とすべつて、アア、と云つてゐ
 る間に流しの溝の中へ落ちてしまひました。

王様の不思議な病氣

霜田史光



方になつて、青い空に星がキラ／＼と光り出す頃になると、極つて王様は寢床の中で顛へながら、

「星が来る……星が来る……星が俺の血を吸ひに来る。」と、さも恐ろしさうに申します。その度にお附の家来や醫者や、また二人の王子達迄も、窓のあたりや空中を見廻すのですが、星がこの家の中に這入つて来よう筈がないので、誰にも王様の云ふ事が判りませんでした。

二人の王子を始め家來達の心配は一通りではありません。國中の名高い醫者は残らず集めるやうにして、王様の御病氣を治させようと思はしたけれども、どの醫者にも王様の病氣が何んであるかさへ判らないのでした。

そんな譯で不思議な王様の病氣は少しもよくなりません。王様はだん／＼に瘦せ衰へて、今では骨と皮ばかりかと思はれる程になつてしまひました。或日、二人の王子が王様の傍

について看護をしてゐました。その日も夕が近くなると、王様のお顔には苦しさうな色が見えました。

「あゝまた夜が来るのか、そしてあの恐ろしい星が、俺の血を吸ひに来るのか、お前達これを御覽。」と云つて、王様は毛布をのけて胸を出し兩腕を力なく伸ばしました。それは見るも氣の毒な程瘦せ衰へてゐるのです。

「俺の體がこんなになつたのも恐ろしい星の爲めだ。いつも夜になつてあたりが暗くなると、この明るい室を目がけて天から星が矢よりも早く飛んで来るのだ。そして俺の胸にチクリチクリと鋭い針を刺して俺の血を吸ひとるのだ。」

「お父様、それではこの室を暗くして置いたら如何でせう。」
「暗くしても駄目だらう。今迄いくら窓の鏝戸をしつかり閉めてもいつの間にか星は光りながら俺の胸の上に来るのだ。」

「だがお父様、私達を始め家來の眼にもそれが見えませぬ。」
「それが不思議ぢや、あんなに光り輝いて来るものがお前達には見えぬかな？ 俺は心細くてならぬ。今夜はお前達二人で劍を抜いて俺を護つてゐて呉れ。」

「畏りました。」

二人の王子はお父様が思はたと云ふのは、純度何か魔物に憑ひないと思ひましたので、今夜こそはその魔物を退治してやらうと待ち構へてゐました。

やがて夜になるとすぐ窓の鏝戸は固く閉められ、家來達も容易に王様の寢室には入れないやうにしました。そして二人の王子は劍を抜いて王様の左右に立つてゐました。

室の内には燈火が晝間のやうに晝々と點いてゐるのですが王様の寢臺の蔭や、室の隅々から、氣のせるか魔物が近寄つて来るやうに思はれました。その時王様は急に手足を蕩擻きながら、苦しさうに叫びました。

「星が来る……星が来る……あゝ俺の胸の上へ乗つた。……あゝ、俺の血を吸ひとりに来た。」

この聲を聞いて二人の王子はサツと身構へをしました。そして王様の胸の上を見ました。けれども何も居りません。はて怪しいと思つて左右を見廻しましたけれども、相變らず燈火が晝々と點いてゐる許りで室内は何の變つた事もありませんでした。けれども王様は益々お苦しみなされるので、兄弟の王子はぬいた劍を王様の胸の上を始め、室内を振り廻しました。

さうして二人の王子が、まるで見えもしない敵と戦ふ心算で一所懸命に剣を振り廻しましたが、その剣には時々柱や壁や、寢臺の脚などがガチリ／＼と當るばかりで、魔物らしいものは觸りもしないのです。然し、暫らくすると王様の苦しきも去つた様子なので、王子達もホッと一安心して愈いで醫者達を呼び寄せて王様にお藥を差し上げました。

二

兄弟の王子はどうかして父上の不思議な病氣を治したいものと、種々と智慧を絞りましたけれども、魔物の正體さへ見ることが出来ないのですから、考へに困つてしまひました。兄の王子は弓の名人でしたから、どうかして弓でその魔物を射てしまひたいと、或晩などは王様の寢室の窓下に隠れてゐて、弓に矢をつがひ、魔物の來るのを待つてゐたこともありましたが、矢張姿さへ見止めることが出来ないで落膽してしまひました。そしてお終ひには、「お父様の御病氣は氣の病む病氣なのだらう、何も來はせぬのだが、時々熱にうかされてあゝ仰しやるに違ひない」と思ふやうになりました。けれども弟の王子は矢張魔物が來るのに相違ないと、固

く思つてゐましたので、これは何よりも先にその魔物の正體を見届けなければならぬと思つて、それにはどうしたらよいものかとしきりに考へ込みました。今日も今日とて一人で腕組みをしながら、考へ／＼お庭を散歩してゐますと、その前



へ足腰の曲つたお婆さんが出て來ました。

「お前は何だ」と、王子は咎めました。

「はい、王子様、私は占者の婆でございます。王子様がある御心配の様子を拜見しまして、出て参りました。」

「お前は占者か、それでは訊ねるが、お前も多分聞いて知つてゐるであらうが、わが父上は不思議な御病氣で、いつになつてもよくならぬ。自分の考へでは夜々魔物が來て父上を悩ますものと思ふが、お前一つそれを占つてはくれまいか。」

「直しうござります。」

占者のお婆さんは早速背負つてゐた包を下して中から何やらカードを取り出し、それを地面の上へ並べて占ひ始めました。さうして占つてゐる中にお婆さんの顔は曇つて來ました。王子はそれを見て心配でなりません。やがて占ひ終つたお婆さんは靜かに申しました。

「王子様、お驚きになつてはいけません。王様には死神がいたのでございます。死神は毎晩星の光に乗つて王様の命を少しづつ取りに参るのでございます。」

王子はそれを聞いて落膽してしまひました。その儘芝生の

上へどつかりと腰を下すと、兩方の眼からは知らず／＼涙が出て來ました。それを見た占者のお婆さんは、

「王子様、そのやうに嘆くものではありません。王様は助からぬと云ふでもございせん。」

「何、助かる道があると云ふのか。」

王子は電氣にでも打たれたやうに喜んで立ち上りました。

「はい、それは天の神様に命をかけてお願いなのです。それには瀧に打たれて荒行をしなければなりません。」

さう聞いて王子は喜びました。そしてどんな荒行をしても、父上の病氣は治さなければならぬと思つたのでした。

その翌日弟の王子は早速瀧に打たれて荒行をして、神様にお祈をしようと、唯一人御殿を出掛けました。

それを見た兄の王子は若しも弟の爲めに父上の病氣が治るやうなことがあると、父上は弟に位をゆづるやうになるかも知れないと思ひましたので、自分もちつとしては居られず、弓と矢を持つて、あてもない魔物退治に出掛けたのでした。

三



星が射られるものではありません。あの星を射るには萬里の火箭を用ひなければなりません。」

「その萬里の火箭とか云ふのは一體何處にあるのですか。」

「聞く所によりますと、その萬里の火箭はこれから二百里ばかり南の海の中の離れ小島の、土人の酋長がたつた一本持つてゐると云ふ話です。然しその酋長は命よりもその火箭を大切にしているさうですから、それを取つて来るのは中々むづかしいことゝ思ひます。」

それを聞いて王子は悪星を射るのが容易でないことを覺りました。けれどもどうかしてその萬里の火箭が欲しいものだと思つて唯一人その二百里先の離れ小島に土人の酋長を訪ねてゆくことにしました。

兄の王子は幾日もかゝつてやうやく海岸へ出ました。見るともう眼の前にそれらしい小島が見えます。王子は早速舟を雇つてその島へ上りましたが、上るとすぐ澤山の土人が手に槍や刀を持つて出て来て王子を縛り上げてしまひました。そして酋長の前へ引當つて行きました。その時王子は云ひました。

「私は決して悪者ではありません。私はこれから二百里先の國の王子です。私が来た用向はあなたの國の寶と私の國の寶とを取り換へたいからなのです。」

それを聞いて土人の酋長はやつと安心したらしく、王子の繩を解いてくれました。

「お前の國の寶とは、どんなものか、持つて来たなら見せてくれ。」と、申しました。王子は早速持つて来た黄金造りの劍を出して見せました。すると酋長はその立派なのに惚々と見入つてゐましたが、

「これを是非何かと取り換へてくれ。」と申しました。王子はこゝぞとばかりに、

「その劍は私の國では一番の寶ですから、あなたの國の一番の寶とならお取り換へいたしません。」と申しました。すると酋長は大きな瓶を持ち出して来て、

「これが一番の寶だから、これと取り換へてくれ。」と云ひました。王子は、

「いや／＼そんなものでは駄目です。もつと安い寶がある筈です。」

かうして兄の王子は萬里の火箭を取ることが出来て喜び勇んで家に歸つたのであります。

弟の王子は兄より一足先に御殿を出て山へ入りました。

そして瀧を見つけて、七日の間それに打たれながら、ろくろく食べ物も食はずに、

「天の神様、どうぞ父上の體から悪魔を追い拂つて下さいませうに。」と一心にお祈りをいたしました。

七日目の朝、王子が相變らず瀧に打たれながら一所懸命お祈りをしてゐますと、眼の前の飛沫の中に、ほんやりと神々しい老人の姿が見えました。そして力のある聲で申しました。

「王子よ、お前の固い心に感じてお前に神眼をさづけてやる。これからは今迄見えなかつた魔物の姿もお前には見えるであらう。早く歸つて兄と力を合せ魔物を退治するがよい。」と云つたかと思ふと霧の中に消えてしまひました。

王子は喜び勇んで御殿に歸りました。暫らくすると兄の王子も歸つて來ましたので、兄弟は互にあつたことを話し合ひ、これならばきつと父上の體から魔物の影を除いて、元通りの丈夫な體にする事が出来るであらうと、喜び合つたのでした。

四

兄の王子は弟の王子が中々の伶俐者ですから、始終びくびくしてゐました。それと云ふのは、弟に手術をさせると、

弟の王子は武蔵王様の變害の跡につき添つてゐますと、王様はいつもの通りに「星が来る……星が来る……」と云つて苦しみ出しました。その時ふと閉め切つた窓の鏡戸の處を見ますと、何やら光つたものがその隙間からスツツと室内へ這入つて來るのを見ました。そして、すぐに王様の胸の上にほんやりとした火の玉となつてぐるぐると廻り始めました。すると王様は如何にも苦しさうなお聲を揚げて悪擧ぎました。王子は始めて星の正體が見えたので、すぐ様劔を抜いて切りつけましたけれども、それはまるで空気を切るやうで何の手應へもないのでした。然し、魔の光りはそれなりふつたり消えてしまひました。

翌日、弟の王子は昨晚のことを兄に話して、

「どうか兄さんの弓でその火の玉を射して下さい。」と頼みましたが兄の王子は、

「己れは己れでやるから、お前はお前で勝手にするがよい。」と角だて、申しました。弟の王子はやつと兄の心持が解つて、これは自分が妬まれてゐるのだと思ふと、自分一人で魔物を退治してしまふことも出来ませんでした。

父上が弟に王様の位を譲るやうになりはしないかと云ふ疑ひなのでした。弟の王子は決してそんなやましい心はなくてただ、父上の病氣が治したいばかりに種々と苦心をしたり一所懸命になるのですが、それが武勇には勝れてゐても智慧の方では弟に敵はない兄の王子には、疑ひの種だつたのでした。弟の王子は山の瀧で神様の御言葉を聞いた通りに兄と力を合せて、魔物を退治しようとしたましたが、兄は何となくそれを喜ばぬやうでした。

兄弟の王子がかうしてゐる間に、王様の病氣は益々悪くなつて、今では何時呼吸を引取るかわからないと云ふ程になつてしまひました。二人の王子はどうかして王様の體につきまとい魔物を追ひ拂つてしまひたいと、互に思つてゐました。兄の王子は首尾よく萬里の火箭を取つて來たのですから、今度は王様に害をする悪を見つけたいとあせりましたが、何しろ博士が教へて呉れた悪星ばかりでも幾十となくあるもので、その中のどれが王様に害をするのだから知りたくと思ひました。それで大切な唯一本の火箭も射することも出来ずにゐました。

弟の王子は考へ込みながら或日お庭を散歩して居りますと、其處へまたいつぞやの占者のお婆さんが出て來ました。

王子は早速聲をかけました。

「お婆さん、お前のお蔭で私も山へ入つて瀧に打たれてお祈りをした爲めに、やつと父上の體に近寄つて來る魔物らしい火の玉を見ることが出來たが、さてそれを退治するのにどうしたらよいか困つてゐるのだ。お前よい智慧があつたら貸して呉れまいか。」

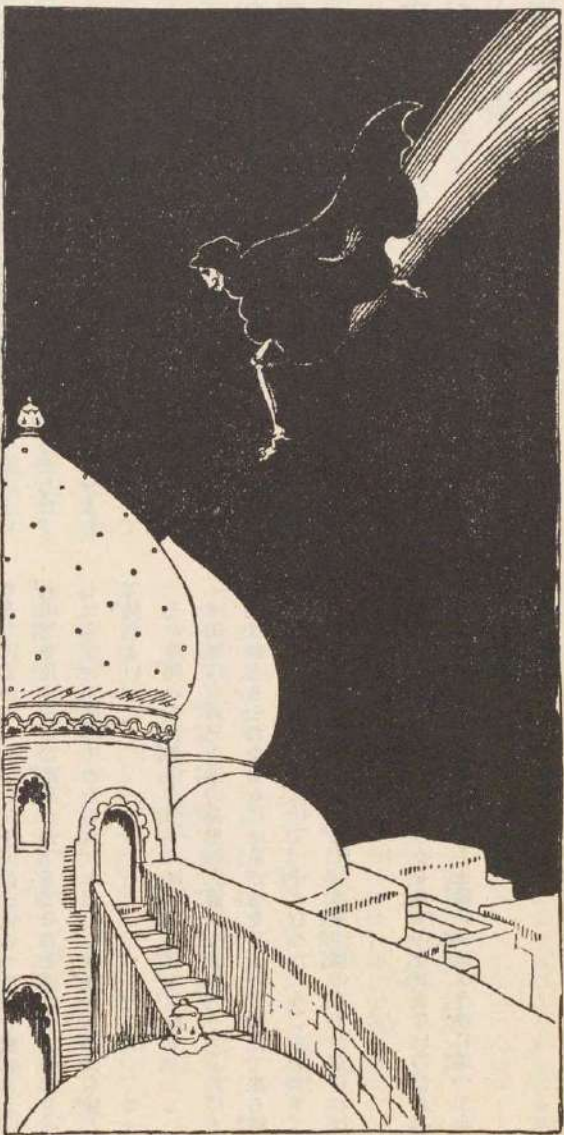
それを聞いて占者のお婆さんは丁寧に頭を下けて、

「その事なら御兄上様の萬里の火箭が一番宜しうございませう。けれどもそれを射るには星が窓を目かけて飛んで來る時に射なければなりませんので、中々むづかしいございませう。どうしてもあなた様の眼で見て、お兄上様の弓で射なければなりません。」

「所がお婆さん、兄上は私と心を合すのを好まないのだよ。」

「それは困りましたな、何しろ王様の御命は今晚に迫つてゐるのですからな。」

「何、父上の命は今夜限りだと?」



王子は驚きのあまり、思はず持つてゐた杖でお婆さんの脊中をどんと叩きました。お婆さんは「痛いッ」と云つて手でさすりながら、

王子は驚きのあまり、思はず持つてゐた杖でお婆さんの脊中をどんと叩きました。お婆さんは「痛いッ」と云つて手でさすりながら、

「では死神とやらも大層權の命令で命を取りに来るのかね。」
「さやうかも知れません。然し、死神の中には中々悪い神があるて、時々悪戯をして命を持つて行くことがあります。」

「ちや父上の命も死神が悪戯に持つて行かうとするのか。」

「いや、いや、王様はもう大分お年を召していらつしやいますから、まさか死神の悪戯ではなさうでござりますよ。」

王子は、それではどうしても父上の命は助からないのかと思ひましたが、急に決心をいたしました。

「よし、自分はどうしても今晚死神の来るのを防いで見せる。假令命に換へてもだ。」と、大きく云ひ切つてお婆さんに別れました。

弟の王子は夕方から王様の寢室へ来て、窓を開放し火の玉の来るのを待つてゐました。その時に兄の王子は窓下の暗い所に隠つて弓に火箭を番へて待つてゐました。

弟の王子は窓一杯自分の體で塞がるやうにして立つてゐました。その後では父の王様の苦しさうな、吸がいたします。やがて夜になつて青い空が紺色になり星が生物のやうにキラキラ輝き出した時に、弟の王子の眼は遠い空の涯からまつ

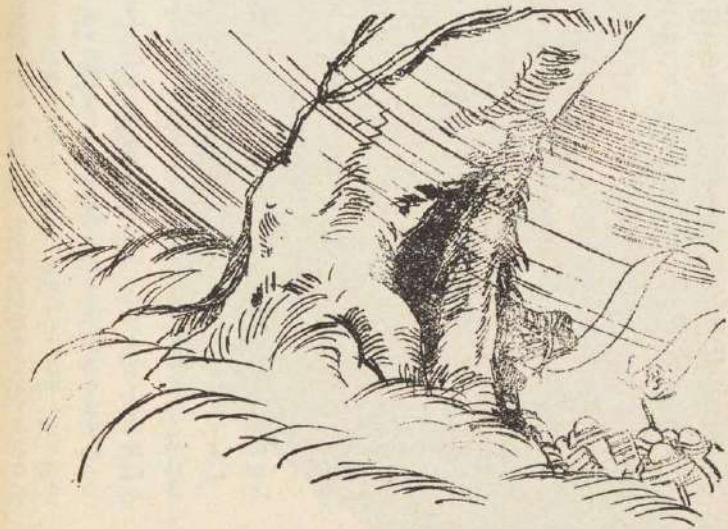
「一體何處へ持つて行かうと云ふのだらう。」

「なんでも、始め人間に命を授けて下すつた大神様の元へ、命をお返し申すのださうでござります。」

すぐに寢室の窓を目がけて飛んで来る星を認めました。いよゝ来たなと思つたので王子は劍も投げ捨て、兩手を擴けてゐますと、その星はすばらしい勢で飛んで来て、忽ち王子の胸にどんと突當りました。王子はそれをムンゾと掴んで、

「兄さん、兄さん、」と呼び立てました。兄の王子は窓下にゐましたが、何やら窓一杯に明るくなつて火の玉のやうなものがぐる／＼廻つてゐますので弓を引き絞つて番へてゐた火箭を放つと、その矢は間違ひなく魔物の光に當つたやうなので、走り寄つて見ると、弟の王子は兄の矢に胸を貫かれて倒れてゐました。兄の王子は驚いて駆け寄り、弟を抱き起しましたが、胸深く射込んだ火箭からは恐ろしい火を吐いてゐて、もう弟は呼吸も絶えてゐました。

兄の王子は自分の心の狭いことから、弟を殺してしまつたことを大層嘆きました。射た火箭は魔物をも退治したものと見えて、それから王様の病は日毎によくなつて、遂には元通りの丈夫な體になりました。これといふのも、弟の王子が命をもつて魔物を防いだからだ、父の王様も兄の王子も、弟の手柄に感じて厚く／＼褒りました。(をほり)



頼朝と義経の対面

窪田空穂

一
義経が平家を破つてゐるあひだに、兄の頼朝も、同じやうに平家をねらつてゐました。何うかして平家を倒して、親の仇を取りたい、そして今、平家が天下を我が物のやうにしてゐるのに代つて、源氏の世にしたい、と思つてゐました。
頼朝は、伊豆の國の蛭が小島にゐました。そこに島流しとされてゐたので、殿しく見張を附けられてゐました。
關東は、源氏の先祖がゐた國なので、前には源氏の家來で今は止むを得ず平家に附いてゐる大名や小名が大勢ゐました。それらの大名や小名も、何うかして源氏の代にしたいと思つてゐますが、今、平氏の勢ひが強くて、下手なことをすると、志が達げられないばかりではなく、自分たちも殺され、残つてゐる源

氏にも迷惑を懸けることになるので、黙ひながらも、ただ好い折の來るのを待つてゐるだけでした。

頼朝はその心持を知つてゐました。

頼朝が四十四といふ年になつた時でした。京の高倉の宮といふ宮様が、方々に散らばつてゐる源氏を集めて、その力で、我儘いづばいにしてゐる平氏を倒さうと思ひ立ちました。そして、内々使を方々の源氏にやりました。

その事は、平家に悟られてしまひました。平家は、第一に高倉の宮と、宮と一しよになつてゐる源頼政を攻めて、何方をも殺してしまひました。そして、この次手に、方々の源氏をみんな殺してしまつて、後々に面倒の起らないやうにしようと思ひました。

蛭が小島にゐる頼朝も、高倉の宮の御使を受けてゐました。そして今は、宮が戦死され、平家が自分をも殺さうとしてゐることを知りました。

頼朝は何うにかしなければならなくなりました。この儘ぢつとしてゐて、平家の手で殺されるか、かなはないまでも、關東八箇國にゐる大名小名で、源氏に心を寄せてゐる者を

集めて、平家と一と戦をするか、何か一つにきめなければならなくなりました。

頼朝は、旗上げをして、平家と戦はうと決心しました。第一の相談相手は、頼朝には舅にあつてゐる北條時政でした。頼朝は時政と相談して、第一に、平家の一族で、今、伊豆の國を治めてゐる泉の兼隆の館を夜討をして、これに勝ちました。今は、力のつづくだけは戦はなければならないことになつて來ました。

二

第一の戦に勝つた頼朝も、第二の戦には負けました。それは相模の小早河といふところでした。此方は三百騎、敵は三千騎で、さんざんに負けてしまひ、頼朝は七騎で、土肥の杉山へ逃げ込み、大木の洞のなかへ入つて、搜して來た敵の眼を避けるやうな危い目に逢ひました。

そこから船で、相模の國の三浦へ行くと、和田義盛など三百騎が従ひました。それに力を得て、上總の國へ向つた時には、方々の大名小名が従つて千八百騎になりました。

上總の國には平廣常といふ大名がゐました。これはその

邊では一番に勢ひのある大名でした。

廣常は家來の者に向つて、

「今度、兵衛佐殿（頼朝の役の名）が、安房上總の軍勢をお集めになるとのことだが、この廣常のところへは、出て来いとかふお使もない。今日一日だけ待つて見て、いよいよお使がなかつたら、此方から伺はう。」

さう云つてゐるところへ、藤九郎盛長が、
「兵衛佐殿からのお使です、上總の介殿（廣常の役の名）にお目に懸りませう。」

と云つて來ました。廣常は嬉しく思つて使に逢ふと、使は頼朝からの手紙を渡しました。

廣常はその手紙を読みました。讀まないうちは「家來の者をよこして呉れるやうに頼む」といふことが書いてあるだらうと思ひました。ところが讀んで見ると「今日まで廣常が來ないといふことは無禮な次第だ、何ういふわけだ。」と叱りつけてありました。廣常はそれを讀むと、感心してしまひました。

「如何にも殿のお手紙らしい。かういふお心持なら、きつと

お志が達せられよう。」

さう云つて、急いで軍勢を集めました。

頼朝が廣常の館へ入つて來た時には、軍勢はもう四萬騎といふ大軍になつてゐました。

源氏がかういふ勢ひになりますと、關東八箇國にゐる、前には源氏の恩を受けてゐた大名、小名、武士は、我も従はう、我も、と云つて、先を争つて駆けつけて來ます。頼朝が下野の國を通つて武藏の國へ入つて來た時には、軍勢は八萬九千騎といふ驚くべき大軍となつてゐました。

「この勢ひで關東を自分のものとしよう。」

頼朝はさう思つて、東海道を西に向つて先へ、先へと進んで行きました。

三

關東でこの事は、奥州にゐる義經の耳に入りました。義經は直ぐに、秀衡に云はせました。

「兵衛佐殿は軍を起して、關東八箇國を従へて、平家を攻めよう、今京へ上つて行かれるところだと聞いた。自分もかうしてゐるのには心苦しい。追ひ附いて、一方の大將となつて

斷きたい。」

秀衡は、

「今までに貴方のお思ひ立ちにならないのが間違つてゐた位です。直ぐにお支度をさせませう。」

と云つて、自分の子に、

「關東に軍が起つて、源氏は残らず出懸けられたさうだ。直ぐに出羽奥州の武士を集めろ。」

と云ひつけました。義經はそれを聞くと、押し止めました。

「いや、千騎も萬騎も連れたいが、日が延びては何もならない。直ぐに立つ。」

と云つて、出懸けました。秀衡は、三百騎だけを附けました。その中には武藏坊辨慶、伊勢の三郎義盛、佐藤三郎次信、弟の四郎忠信などがゐりました。

主従三百騎は、駈けられるだけ駈けさせて路を急ぎました。馬の腹がちぎれようが、脚が碎けようがまはすに駈けさせました。

出羽の國境へ來た時でした。義經は後を振り返つて見て、
「軍勢が少くなつたな。」





と云ひました。家來の者は答へて、
「馬の爪が缺けたり、脚を碎いたりしたのがあつて、路に残つたのがあるからです。唯今は百五十騎になりました。」
と云ふと、義経は、

「よし、百騎が十騎になつてしまふまでも駈けさせろ。後ろを振り返つて見るな。」
と云つて、先へ立つて續けて駈けさせました。

下野の國を駈けて通り、武藏の國へ入つた時には、三百騎は八十五騎になつてしまつてゐました。

武藏の板橋で、義経は土地の者に、

「兵衛佐殿は何方に居られる。」と尋ねますと、尋ねられた者は、
「昨日ここをお立ちになりました。」と答へます。

武藏の國府に着いて、同じやうに尋ねると、

「昨日お通りになりました。唯今は相模の平塚に入らつしやいます。」と答へます。

平塚に着いて尋ねると、

「もう足柄山をお越しになりました。」と答へます。

義経はちれつたくなり、足柄山を越して、伊豆の國府

に着いて尋ねますと、

「昨日ここをお立ちになつて、今は駿河の國の浮島が原に入らつしやいます。」と答へました。

「それでは幾らもない、もう」と息だ。

と云つて、義経は一層馬を走らせて追つて行きました。

四

義経が浮島が原に着くと、云はれた通り頼朝の陣が見えませんでした。陣は廣く、大きく幕を張り渡してありました。

大將の頼朝の陣と見えるところから三町ばかり此方へ、義経も陣を取つて、暫く息を休ませました。

頼朝は、義経の陣を見て、不審に思ひました。それは源氏のしるしである白旗を立ててゐるからです。

「あの白旗を立てて、小綺麗な武者が五六十騎ゐる。あれは誰だらう、見當が附かない。信濃にゐる源氏は、今度は出て来ないし、甲斐の源氏は二陣にゐて見えなわけだ。何ういふ人か、よく名前を聞いて来い。」

頼朝はさう云つて、堀の彌太郎といふ男を使にして聞きにやりました。彌太郎は家來を大勢連れて其方へ行きました。

彌太郎は此方の陣からは、やゝ距離のあるところへ馬をとどめました。そして、

「そこに、白旗を立てて入らつしやるのは何方ですか。よくお名前を承つて来いと、鎌倉殿(頼朝のこと)からの仰せです。」

さう云ふと、此方の陣から一人の武者があらはれました。

それは年は二十四か五くらゐの、色の白い、見よい人で、赤地の錦の直垂を着、紫で威した鎧の、金具の飾りのあるのを著て、鍔形を打つた兜をかぶり、手には弓を持つて、黒い馬の、速ましい馬に乗つて、彌太郎の方へ歩み寄らせて来て答へました。

「鎌倉殿には御存じのはずです。幼い頃は牛若と申した者です。此頃は奥州の方へ下つてをりましたが、軍をお起しになつたと承り、夜を日についで駈けつけました。お目に懸れるやうにお計ひを願ひます。」

「それでは、御兄弟で入らつしやいますか。」

堀の彌太郎はさう云つて、此方を敬つて急いで馬から下りました。そして、直ぐに義経には物を云はず、家來の佐藤三



は暫く静慮してゐましたが、言はれる通りにしました。席がきまると、頼朝は、義経の顔をつくづく眺めてゐましたが、その眼からは涙が流れ出して来てとまりません。義経も、兄の泣くを見ると、同じやうに涙がこぼれてとまりませんでした。

二人の兄弟は、しばらくのあひだは、ただ泣いてゐるだけでした。

頼朝は涙を拂つて、義経に云ひました。

「あゝ、父上に死に別れてからといふもの、貴方が何處に何うしてをられるかも分らなかつた。幼い時に見たきりで、それからは一度も顔を見ることもできなかつた。私は池の尼に命を助けられて、伊豆に流されてからは、伊藤、北條などに番をされてゐて、何一つ自由にならないので、貴方が奥州へ下られたといふことはほのかに聞いたが、手紙をやることさへできなかつた。兄弟といふことを思つて、かうして取敢へず上つて来て呉れ、嬉しさは、口では云へない位です。あれを見て下さい。かうした命懸けの大事を思ひ立ちました。關東八箇國の者ではあるが、みんな他人なので、大事な相談の



郎を呼び出して挨拶をしました。

彌太郎は引返して頼朝の前へ行つて、聞いた通りを云ひました。頼朝は何んな時にも落ちついてゐる人ですが、その時は非常に嬉しい様子をしました。

「それでは、此方へ來られるやうにしろ。逢はう。」と云ひました。彌太郎は直ぐに引返して来て、義経にそれを傳へました。

義経は大變喜んで、急いで頼朝のゐるところへ行きました。その時には佐藤の三郎と四郎、伊勢の三郎が供をしました。頼朝の陣の中には、關東八箇國の大名、小名がみんな一しよに入つてゐました。それぞれ疊を一帖敷いて、その上に敷皮を敷いて坐つてゐました。頼朝も同じやうにしてゐました。義経は、兜を脱いで供の者に持たせて、幕の中に入りました。そして幕のそばのところに畏まつてゐました。それを見ると頼朝は、敷いてゐた敷皮から立つて、自分は疊の上の方へ移つて、

「それへ、それへ。」と云つて、義経を敷皮の上へ對らせよとしました。義経

出来る者はるない。それに、一度はみんな平家に從つた者ばかりなので、私が氣弱い風でも見せようものなら、何時何うなるかも分らないといふ氣がして、夜もまるで眠れないくらゐです。京へ向けて平家の討手を出さうとは思つたが、私が自身で行くと關東の方が留守になつてしまつて、何んかことが起るかも知れないといふ危さがある。代りの者をやらうと思つても、頼みになる兄弟はない。他人をやると、平家と一しよになつて、却つて此方を攻めるかも知れないと思はれるのでそれも出来ない。全く體が一つで、當惑しぬいてゐるところです。今貴方が来て呉れたといふのは、まるで死られた父上が生き返つて来て下さつたやうな氣がします。

それにつけても思はれるのは、先祖の義家公が、後三年の軍に軍勢を多く失はれて、栗屋川まで退かれた時、氏利八幡大菩薩に願を懸けられると、計らずも京にゐた弟の義光公が、三千騎を率ゐて助けに下られ、力を合せて奥州を平けられたことだ。義家公のその時の嬉しさも、今の私の嬉しさ以上ではなかつたらうと思はれる。これからは、船と水のやうに親しくして、先祖のお受けに

なつた恥もそぎませう。亡き父上の御憤りも休めるやうにしませう。さう云ふと頼朝は、又新に涙をながしました。義経も直ぐには返事もできず、こぼれ落ちる涙を袖で拭いてゐます。その様子を見てゐる大名や小名も、二人の兄弟の心持を察して、誰もみんな涙をこぼしました。義経はやうやく挨拶をしました。

「仰しやる通り、幼い時に御目に懸つたぎりですが、その覺えはございませぬ。貴方が伊豆へお下りになつた後は、山科にをりまして、七つの時鞍馬へ参り、十六までは其處で學問をしました。その後京都へ出て参りますと、平家が殺さうと眼つてゐると聞きましたので、奥州へ下つて秀衡にたよつてをりましたが、今度貴方が大事をお起しになつたと承つて、取敢へず駆けつけました。かうして貴方にお目に懸りますと、亡き父上にお目に懸つたやうに思ひます。私の命は父上に差上げます。體は貴方に差上げます以上、何のやうな仰せにも従つて、何なりとも致さなくてはおきませぬ。」

さう云つて、云ひ切らないうちに、義経も新たに涙をこぼしました。思ひ詰めた心が涙になつたのです。(をばり)



世界名作童話物語

家なき子 (つとぎ)

三宅房子

風吹く夜

一

マリーの真町まで折角たづねて来たのに、

「おや、君はイタリヤ人かい。」と私に尋ねました。私はイタリヤ語を親方から習つたことがあるので、少しは分りましたが、まだ自由には使へなかつたのです。

「いゝえ」と、私はフランス語で答へました。「おや、つまらないなあ。君がイタリヤ人だといふんだがなあ。」少年は大きな目で私を見ながら、つまらなさうにいひました。

「君の生れた處は何處？」
「今度私がつねました。
「リュツカといふ處だよ。君とさうだと、いろ／＼聞きたいと思つたのだよ。」
「僕はフランス人です。」
「さう、それはいゝね。」

「おや、君はイタリヤ人よりかフランス人の方が好きなの。」私は妙に思つてきゝました。

「さうぢやない。君がいゝといつた時は、君のためを思つていつたのさ。もし、君がイタリヤ人だつたら、きつとうちの親方に使はれにこゝに來たのだから、さうだと氣の毒だと思つたの。」

「ぢやア、あの人の悪い人なんですか。」
少年は何とも答へませんでした。しかし、その時の目付が、言葉でいふよりはもつとつと澤山のことを語つてゐました。

少年はこの話をつゞけるのがいやだと見え、爐のある方へ行きました。見ると、爐の上に小さな鍋がありました。私も火にあたらうと思つて爐のそばへ行きますと、その鍋が妙な形をしてゐるのに氣づきました。鍋の蓋にはまつくなが管が突出してゐて、中の蒸氣が抜けて出るやうになつてゐるのです。それからその蓋には煙香がついてゐるばかりか、錠までかゝつてゐて、開かないやうになつてゐるのです。

「なぜ錠がかゝつてゐるの。」
私は不思議に思つてきゝました。
「僕はスープを飲まないやうにさ。僕は鍋の

番をいひつかつてゐるのだが、親方は僕を信用してゐないのさ。

「私ばなかくつて、思はずくす、笑ひました。すると、少年は悲しうな加をして、
「君は笑ふのだね。僕のことを食しんぼうだと思つたのだらう。けれどもネ、もし君が僕と同じ境遇になつたら、やつぱり僕と同じことをするかも知れないぜ。僕はお腹がへつてたまらない。だから、鍋の口からスープの匂ひがすると、いよ／＼お腹がへつて来るのだ。」
「親方は君に十分の食物くれないの。」
「あ、それが罰なのだ。」
「まア、——」私ばびつくりしました。

「うちの親方は、この家に子供を澤山置いてゐるのだよ。煙突掃除に行く子供もあれば、紙屑拾ひに行く子供もある。餓くだけの方のない者は、町で唄を歌つたり乞食をしてゐる。親方は僕には小さな廿日鼠の白いのを二疋くらゐ、それを毎晩見せ物に持つて行つて三十銭のお金を儲けて来いといひつけたのだ。もし三十銭が一銭でも不足すれば、その不足分は罰で打たれるのだ。君三十銭のお金を儲けて

るのは随分骨が折れるよ。しかしネ、親で打たれるのはもつと辛いぜ。だから僕は一生懸命になつて、いろ／＼のことをやつて見るが、時々足りないことがあるので、親方は氣狂ひのやうになつて怒るのだよ。でもね、たゞ可哀さうだといつて、お金をくれるやうな人はなかくないよ。」
少年はこゝまで話した時、一寸の間歇つてゐましたが間もなくまた話しつゞけました。

「僕はすゑぶん若い顔をしてゐるだらう。僕は肥れないでだん／＼蒼くなつて行くんだよ。この頃では僕を見る人が、あの子はきつと今にお腹が空いて死んでしまふだらうといふやうになつた。僕はそれを聞いて喜んでゐるのだよ。ひもしじいのも随分つらいが、おかげで僕を氣の毒がる人がだん／＼近所に出て来たから、僕の貧ひの少い時には、パンやスープを恵んでくれるやうなつた。それは僕には一番うれしい事だ。親方にぶたれる事もないし、晩飯に芋がもらへなくつても、どこかでお飯をもらつて食べて来てるから苦しいこともない。ところがね、ある日のこと、

親方は僕が町の水菓子屋でスープを買つて飲んでゐるところを見つけてしまつたのだ。それで僕が晩飯をもらへなくつても平氣な譯がわかつてしまつた。それからといふものは僕が家の留守番をして、このスープの見張りをするやうにいひつけられてしまつた。親方は毎朝出て行く前に、肉と野菜を鍋に入れて蓋に錠をかけてしまふ。僕のすることはそれを煮え立つのを見るだけだ。僕はスープの匂ひをかいてゐるだけだから、お腹はちつとも張らない。それどころか、いけいお腹がへつて来る。ねエ、僕は随分若いだらう。しかし僕は外へ出ないから、みんながさういふのも聞かないし、鏡もないから、ちつともわらないよ。」

「君ば外の人より若かないよ。」
「私ば安心させるつもりでいひました。」
「君ば僕を安心させたいと思つて言つてゐるのだね。けれど、僕はもつと眞蒼になつて早く病氣になりたいのだよ。僕は非常に悪くないのさ。」
私ばあきれた少年の顔を見ました。

「君にはまだわからないのだね。ひどく身體が悪くなれば、みんなが世話をしてくれるぢやないか。さしなれば死なせてくれるぢやないか。死ねば仕合せだ。何もかもおしまひになる。もうお腹をへらすこともなければ、打たれることもなくなる。それに僕たちは死ねば天に昇つて神様と一しよに住むことが出来るのだから、さうすれば僕は天の上から母さんや妹を見下してゐることが出来る。神様にお願ひして、妹を不仕合せにしないやうにしていただくことも出来る。だから、僕は早く病院へやつて貰ひたいと思つてゐる。」

少年は傍へよつて来て、大きな目でちつと私のことを見ました。その大きなギョ／＼とした目や、腫んだ頬や、血の氣のない唇が怖い位に思はれました。
「君ばもう病院へ行かなければいけないだらう。随分悪いやうだから。」
「いよ／＼かれ。」
少年は足を引きすりながら食卓の方へ行つて、それを拭きはじめました。

その時、扉が開いて一人の子供が入つて来



ました。その子供はグアイオリンを握つてゐて、手に大きな古村木を持つてゐました。
「その木をおくれよ。」若い顔の少年はその入つて来た少年のころへ寄つて行きました。けれども、その少年は村木を後にかくしてしまつて、
「いやだよ。マッチャ。」と、いひました。
私は若い顔の少年の名がマッチャであることを知りました。
「薪にするんだからおくれよ。それがあると

スーパがおいしく煮えるから。」
「君ばスーパを煮るために僕が持つて来たと思つてゐるのかい。僕は今日たつた三十六銭しか貰ひがなかつたのだ。だからこの村木を打たれないお呪ひにするのだ。これなら四銭の足しになるだらうね。」
「矢張やられるよ。足しになるものか。」
さういつてゐるところへ大勢の子供が歸つて来ました。入つて来た、と見ると、いけいグアイオリンや盛琴や笛などを持つてゐる。中には見世物の鼠の籠を持つてゐるものもありました。其處へ鼠色の服を着た小さな男が入つて来ました。それがこゝの親方のカロフオリでした。
入つて来た瞬間カロフオリは怖い目をしてちつと私を睨めました。私ばぞつとしました。
「この子供は何だ。」と彼は眼鳴りました。
若い顔のマッチャは、早速丁寧に私の親方が言ひ置いて行つた事を彼に傳へました。
「あ、グアイオリンが来たか。何の用だらう。」
「私は存じません。」とマッチャが答へました。
「俺はお前に言つてるんぢやない、こゝろに

る子供にいつてゐるのだ。」

私は、そこでほん／＼いひました。

「親方が直きに戻つて来て用事を自分で申上げます。」

「は、あ、この僧はなか／＼要領を得てゐるな。無駄なことをいはない。お前はイマヨリヤ人ではないな。」

「え、僕はフランス人です。」

その時一人の子供がパイプに煙草をつめてガロフオリのところへ持つて来ました。すると、また一人の子供がマツチに火をつけて出しました。

「硫黄くさいぞ、この煙鬼め。」親方のガロフオリが取鳴りました。そしてその子供の手からマツチの棒をひたくつて煙の中へ投げこみました。

子供はあわて／＼もう一本のマツチをすつて、しばらく黙してからまた持つて行きましたが、

「だめだ、とんちきめ」と取鳴つてその子供を突き倒しました。

ガロフオリは半聲に、屏の、一人の子供を叩



ひました。

「リカルドや、お前はいゝ子だからマツチをすつておくれ。」

このいゝ子といはれたリカルドといふ少年は、すやいはれた通りになりました。

ガロフオリは、煙草をチカ／＼吹かしな

がら

「いゝ／＼これからお仕事だ。おいマツチヤ、紙面を持つて来な。」

着い顔のマツチヤは、用をいひつけられたことが大層にありがたいうに、すぐと眞黒けな小さい紙面を持つて来ました。しかし親方のガロフオリは、それには目もくれないではじめに硫黄くさいマツチをすつた子供を呼びつけました。

「お前には昨日一錢貸しがあるな、それを今日持つてくることになつてゐるが、黙ら持つて来な。」

いはれた子供は赤い顔をして、しばらくもぢ／＼してゐましたが、

「一錢足りません。」

「一錢足りない。それだけか。」

「昨日の一錢ではありません。今日一錢だけ足りないのです。」

「それでは二錢ぢやないか。貴様のやうな奴はないぞ。」

「私が悪いわけではないんです。」

さむけることが出来るのだから、一生懸命やれよ。さういつて、親方のガロフオリは煙の方へ身体を向けました。

私は一人で隅の方に立つてゐましたが、子供も腹が立つて堪りませんでした。それと悔いのとでぶ／＼震へました。之が私の親方にならうといふ男なのでせうか。私もこの男にいひつけられた通りのお金を持つて歸らなかつたら、矢張りこんなに打たれるのだ。

着い顔のマツチヤが平氣で死にたいといつてゐたその譯もはじめてわかりました。

びしり／＼と第一の鞭の音がして子供達の膚に當つた時、もう私の眼は涙で一ぱいになりました。随て第二の鞭が鳴りました。子供達はひい／＼聲を立て／＼泣き出しました。三度目には聞いてゐられないやうな聲を出しました。

「母さん、母さん」と子供達は叫びました。

その時です。私の親方が扉をあけて入つて来たのです。

親方はいきなりリカルドのところへ飛んで行つて鞭を奪ひとりしました。そして、ガロ

四六

「ガロフオリの前へ行つて突立つたのです。これが如何にも喧嘩の間に起つたので、ガロフオリはあつけにとられてゐました。でも、ぢきに氣を取り直して、わざと種かにいひました。

「恐ろしい勢ぢやないか。なにね、この子供達は氣が造つてゐるのだよ。」

「馬鹿ツ、取しくはないのか。」

「それ見る。私もさういつてゐたのだ。」

「止せ。とほげるなよ。子供にいつてゐるのぢやない、貴様になつてゐるのだ。こんな手向の出来ない可哀さうな子供をいぢめるといふのは何といふ卑怯なやり方だ。」

「この老はれめ、餘計なお世話をやくな。」

ガロフオリの様子が急に變りました。

「警察へ訴へるぞ。」と親方が叫びました。

「何だ、警察でおどすのか。」

「さうだ。」

「は、あ、そんな風にお前さんはいふのだな。よし／＼、おれにもいふことがあるぞ。お前のした事は何も警察に關係のある事ぢやないが、おれが一度本當の名前かいふと、それを

四七

「いひわけをするな。罰金ばかりかつてゐるだらう。さア、着物を脱げ。昨日の分が二つ、今日の分が二つ、合せて四つだ。それから横着の袖として夕飯の手はやらない。おい、い子のリカルドや、お前はいゝ子だから氣晴しなさせてやるよ。鞭を持つてお出で。」

二番目にマツチをつけたリカルドといふ少年は太い二本の革紐のついた鞭を腰から下して来ました。その間に二錢足りない子供は上着のボタンをばづして、シャツまで脱いで、身体を裸まで出しました。

「ちよつと待て。金の足りないのは此奴だけではあるまい。また外に仲間があるだらう。」

親方のガロフオリはいま／＼しさうにいづく、一々外の子供達をしらべはじめました。

ところが、皆んで五人ありました。四錢不足した代りに古材木を持つて来た少年も、勿論その中の一人でした。

五人の子供はガロフオリの前に並びました。

「さア、リカルド、おれはこんなところを見るのはいやだから向を向いてゐるが、音だけば聞いてゐるぞ。その音でお前の腕の力をき

「ただで、恥になる人がどこかにゐるやないかね。」

「親方は黙つてゐました。親方の恥だといふのは何だらう。私はびつくりしました。しかし、私が考へる隙のないうちに、親方は私の手をひつぱつて、

「さア、行かう、ルミー」といつて、原口の方へすん／＼行きました。

「まア、いぢやないか。君も話があつて来たのだらう」とカロフオリは、嘲けるやうにいひました。

「お前なんぞにいふ事はない。」

「さういつたきりで、親方は私の手をしつかり押へて階下段を下りました。私はどんなにほつとした氣持になつたでせう。地獄の口から逃れたやうでした。私は親方の首にかけりつきたいやうな氣がしました。

「私と親方はやがて人通りの多い往來へ出ましたが、歩いてゐる間、親方は一言も口をききませんでした。間もなく狭い路へ入つた時、路端に石があつたので、親方はそれに壁をか

けて、度々手でなでてゐました。これは親方が困つた時にする癖なのです。

「私には一錢のお金もないし、一かけのパンもない。丁度バリーの溝の中に捨てられてゐるやうなものだ。お前お腹がすいたらう。」

「私は今朝小さいパンをいたゞいたきりで、あれつきり何も食べませんでした。」

「可哀さうになア。お前は今夜も夕飯なしで寝なければならぬのだよ。しかし、何處といつて寝る處もない。」

「では、あなたはカロフオリさんの家に泊るつもりだつたのですか。」

「お前だけはあそこへ泊めるつもりだつた。それか、私は、お前を冬中カロフオリが借り代として十四日は出すだらうから、それで暫くやつて行くつもりだつた。しかし、あゝ子供達をひどく扱ふところを見てはお前を置く譯に行かなかつた。」

「時間はもう大分おそくなつてゐました。寒さがひどくなつて來ました。北風がヒューヒューと吹いてゐます。長い間親方は石の上に

膝をかけたまゝ考へてゐるので、私とカヒはその前に黙つて立つて、親方の決心のつくの待つてゐました。たうとう親方は立ち上りました。

「どこへ行くんですか。」

「ジャンナイといふところの石切場まで行く。そこでいつか賣たことがある。お前殺れてゐるかい。」

「私はカロフオリさんの處で休みました。」

「私はちつとも休まなかつたのでつらい。あまり無理は出來ないが行かなければならぬ。さア、昔な前へ進め、子供たち

これは親方が私や犬に向つて出發する時にいふ上機嫌な合圖なのです。しかし、今夜は悲しさにいひました。

親方と私はバリーの町の中をさまよひ歩いてゐました。暗い夜でした。風に吹かれながら瓦斯燈がぼんやり往來を照してゐました。カヒは私の後からついて來ますが、可哀さうに時々立止つて、掃蕪の中を探して、骨やパン屑を探してゐました。それはお腹をへらし

ついで、いくも解しても無駄でした。カヒは耳をたらしと下げて、とぼとぼと私の後について來ました。

「親方は歩いてゐながら一言も口をききませんでした。親方はふるへてゐるやうに思はれました。時々立止つては私の肩に寄りかゝるやうにしてゐましたが、その時は、身體の全體がふるへてゐて、今にも倒れさうに思はれました。御病氣ぢやないんですか。」

「私は親方にいひました。『私もさうぢやないかと思つてゐるのだよ。兎に角、私は非常に疲れてゐる。この寒さが年をとつた私の身體にひどくこたへる。私はいゝ寢床と爐の前で夕飯が食べたい。しかし、それは夢だ。さア、前へ進めー子供達。』



「お前森が見えるかい。」と、親方はふいに立止つて私にききました。

「そんなものが見えせん。」

「大きな黒い塊の様なものは見えないかい。」

「私は四方を見渡しました。木も家も見えませんでした。風がうなつてゐる外には何の物音も聞えませんでした。

二三分たつてから親方はまた立止つて、森が見えないかと尋ねました。私は何んだか恐ろしいやうな氣がして、

「お前、こはいで目が落ちつかないのだらう。もう一度よくごらん。」

「ぼんたうです。森なんか見えせん。」

「ひろい道もないかい。」

「何も見えせん。」

「では、道を間違へたかな。」

「私には何とも答へることが出來ませんでした。何處にあるのか、何處へ行くのか全く知らないのですから。」

「もう五分ばかり歩いて見よう。それでも森が見えなかつたら、こゝを引返して來るのだ。もしかすると、道を間違たのかも知れない。」

「僕、もう歩けません。」

「お前を背負つて私が行けると思ふのかい。坐つたら、もう私は立上ることが出來ない。そのまゝ寒さで凍え死んでしまふだらう。」

「私はそこで、元氣を出してまた歩き出した。」

「道に深く車の輪の跡がついてゐないかい。」

「いゝえ、何にも。」

「ちやア、引返さなければならぬ。」

私達は引返しました。こんどは向ひ風でしたから、顔に當ると鞭で打たれるやうでした。「車の輪の跡があつたら言つておくれよ。左の方へ分れる道を行くのだからね。」



十五分ばかり私たちは風と争ひながら歩きつづきました。しかし、もう踏出す方はなかつたのですが、でも私は親方をひきするやうにして歩きました。

やがての事、私は横へ入る道を見つけたやうに思ひました。私は親方の手をはなして、急いで歩きへ行つて見ると、たしかに往來に深い車の輪の跡がありました。「輪の跡がありました」と、私は叫びました。「ああ、私達は救はれたのだ。よく助産、今

度は森が見えるだらう。」
「私は何か黒いものが見えたので、森が見えたやうだとひきました。」
「五分のうちに其處まで行ける。」と、親方がひきました。

私と親方はとぼ／＼と歩きました。しかしその五分間がそれ／＼永い時間のやうに思はれました。

「車の輪のあととどつちにあるね。」
「右の方にあります。」
「石切場の入口は左の方だよ。気がつかずに通りすぎてしまつたのかも知れない。後戻りしなければいけないだらう。」
「輪の跡はどうしても左の方にはついてゐません。」
「それではまた後戻りだ。」
「私達はもう一度あと戻りをしました。」
「森は見えるかい。」
「え、左手の方に。」
「それから車の輪の跡は。」
「もうありません。」
「私はいくら目が見えなくなつたのかわらぬ。親方は低い聲でひきました。そして、両手で目をこすつてゐましたが、「森について眞直においで、私に手を貸しておくれ。」
「おや、森があります。」

へ出かけるのだから、全頭進んだつて、家へ入ればいけない。もう少し行かう。」
しかし、いくら意地をはいても、身體の方はもうつきてゐたのです。しばらく行くと、また親方は立止りました。

「少し休まなければ」といつてゐましたが、たうとう「私はもう歩けない。」と親方は力なく叫んだのです。

丁度そこに、大きな花園のある家がありました。その家の門のところまで来た時、
「私はこゝへ坐らう」と親方はひきました。
「でも坐れば、こんど立上ることが出来なくなる」といつたでせう。」

親方は返事をしませんでした。たゞ手まねをして私に門のところへ落ちてゐる藁を積みあげるやうにと指圖をしました。私が藁を集めてそこへ敷くと、親方はその上にはつたりと倒れました。親方は藁をがた／＼いばせて、身體中をひどくふるはせてゐました。

「しつかりと私にくつついておいで。カピを膝にのせておやり。體のぬくみで、お前もいづらか温くなるだらうから。」
今の場合、こんなまねをすれば凍えて死んでしまふことは、親方はよく承知してゐる筈

「いゝや、入れてくれればしない。この邊に住んでゐるのは植木屋だ。朝早くみんな市場

「いゝや、それは石の山だ。」
「いえ、たしかに山です。」
親方は私のいふのが本當かどうかと思つて両手でもつて壁にさばりました。

「さうだ、入口はふさいでしまつたのだ。車の輪のついた道を探してこらん。」
私はお前のこらすまはつて見ましたが、たうとうわかりませんでした。入口もなければ門もないのです。

「何もありません。もつと先を見ませうか。」と、私はひきました。
「いや、石切場に壁が立つたのだ。」
「壁が立つたのですつて、――」
「さうだ、入口をふさいでしまつたのだ。中へ入ることが出来なくなつたのだ。」
「ではどうしませう。」
「どうするつて、もうわからなくなつてしまつた。こゝで死ぬ外はない。」
「まあ、親方――」

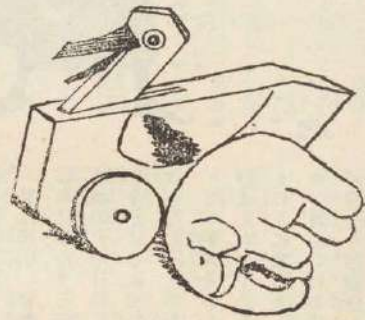
「しかし、お前は死にはしない。お前はまた若いのだから。さア歩かう。お前はまた歩けるか。」
「しかし、あなたは何。」
「私はいゝ／＼歩けなくなつたら、老いばれ馬のやうに倒れるだけさ。」
「こゝへ行きませう。」

です。それなのに、私にこんな重荷を背負つてゐるのは、もう正氣でなかつた證據でした。親方にはもう自分を支へるだけの力がなくなつてゐました。

私が親方のそばへつたりと這ひつた時に、親方は身體をかめて私にキッスしました。これは親方が私にしてくれた二度目のキッスでした。そして、ああ、これが最後の接吻となつたのです。

私は親方にすりよつたと思ふと、もう目がくつついてしまつたやうな気がしました。もういづら開けようとしても、眼目でした。腕をつれて見ても何の感じもありませんでした。カピは私の膝の間にもぐつて、もう眠つてゐました。往來には人ツ子一人もありませんでした。私はこゝで死にかけてゐるのだと思ひました。さう思ふと、大變悲しくなりました。その時、私はシャバノンの村のことを思ひました。可哀さうな養親の母さんのことも思ひました。私はもう一度母さんにあふ小さな農園も見ることが出来ずに死んでしまはなければならぬのでせうか。

やがて、心が重苦しくなつたやうに思ひました。そして、もう覺えがなくなつてしまひました。(つゞく)



いちんちよちよち良雄さん

それでもよちよち良雄さん

やアやアどうどうおつこつた

やれやれ其處はお縁側

それぞれ其處にお煙草盆



よちよちあゆみの

良雄さん

若山 牧水

よちよち歩みの良雄さん

よちよちよちよち何處へゆく

それぞれ其處にお座蒲團

油で煮られた王様の話

内藤 豊雄



わかし印度の或る國に、カランといふ王様が居りました。或る時この王様の

の魔法遣ひが世間で居りました。この魔法遣ひは、不思議な魔法遣ひを遣ひましたが、中でもこの男の持つて居るマントは實に奇妙なマントでした。魔法遣ひがこのマントをバツと振ふと、欲しいと思ふだけのお金が出、出て来るのです。カラン王は實はこの魔法遣ひから毎朝百圓のお金を貰つて来るのでした。何うです。これで王様の財産がいつまで経つても減らないわけがおわかりでせう。しかしいくら魔法遣ひでも、たゞでこの金を王様にやるわけはありません。その代りに次のやうな約束が王様としてあるのです。それは——毎朝王様の體を油で揚げてフライか天麩羅のやうにして、それを魔法遣ひがむしやくと食べてしまふと云ふのです。

そんな馬鹿々々しい話があるものか。それでは王様が死んでしまふぢやないか。——と皆さんはびつくりな

は、その家來や人民達に次のやうな約束を致しました。

「私は毎朝、食物のない貧乏人や爲になる仕事をするのでお金のいる者達に百圓の金を分けてやる。毎朝百圓のお金を分けるまで私は決して朝の御飯を食べない。この事を誓つて約束する。」この約束をきいて人民達は大そう喜びました。何といふ情深い王様だらう、と口々に賞めました。カラン王は實は、その賞められるのが望みでした。人民が自分を慈悲深い王様だと賞めるのを聞いて、王様は満足さうに笑ひました。毎朝々々、澤山の貧乏人が御殿へ参りました。毎朝々々、貧乏人や學者や、

でせう。賢くのがあたりまへです。しかしまあお待ちなさい。實はこれにも一つの秘密があるのです。ついでにこの秘密も皆さんにだけそつと話して上げませう。

たしかに魔法遣ひは自分の住家へ毎朝王様が来るのを待つてすぐ大きなフライ鍋へ油を煮立て、王様をその中へ入れ丁度私達がお魚や牛肉をフライや天麩羅にするやうに王様をジューと油揚げにしてしまふのです。さうして王様が狐色にコンガリと揚がると、すぐムシヤク、とその肉をうまさうに食べるのです。しかしそれだけでは王様が死んでしまひます。では何うするかといひますと、魔法遣ひは王様の肉だけはすつかり食べますが、骨はみんな残して置くのです。その骨をお皿へ並べて魔法遣ひは口中でクシヤクと何かお呪ひを云ひながら掌を三度ボン／＼と鳴らすの

いろ／＼有益な仕事をする人達が、大勢御殿へ参りました。さうして毎朝毎朝、きつと百圓だけのお金がこの人達に分け與へられました。その後で王様は愉快さうに朝の御飯を食べました。さて毎朝約束を果してをる内、もう長い年月が経ちました。いくら王様の財産が澤山あつても、毎朝百圓づつ人民に與へて居ては、いつかきつと無くなつてしまふに相違ありません。所が不思議な事には、朝にさへなれば王様はきつと何處からか百圓のお金を持つて来るのです。家來や人民達は不思議に思ひましたが、さて王様が何所からその金を持つて来るのかわかりませんでした。

それには一つの秘密があつたのです。私はそつと皆さんにだけ、その秘密をきかせて上げませう。

(二) 王様の御殿に近い山の上に、一人

です。するとまあ肥し不思議でせう。王様は又ひよつくり生き返るので、顔も手足もどこも元の通りに、いやむしろ前よりも肥つたくらゐで、ピンピンして王様に再び生き返るので、さうして今フライになつて食べられた代りに、魔法遣ひからマントを振つてもらつて、百圓のお金を受け取つて元氣よく宮殿へ歸るのでした。しかし人民達は誰一人この秘密を知る者がありませんでした。

(三)

さて、その國からすつと離れた或る大きな湖水に、白鳥の夫婦が一組住んで居りました。ところがこの白鳥の夫婦は大そう賢い白鳥でした。何故といつて、この白鳥は眞珠でなければ食べなかつたからです。他の鳥のやうに穀物や果物は決して食べず、眞珠ばかりを食べ居ました。ですからこの白鳥の夫婦は、實に立派な姿をして居ま

白鳥を捕へさせました。さうして汚い狭い籠へ白鳥夫婦を押し込んでしまつて、いろ／＼の餌を持って来て與へましたが、賢澤な白鳥は見向きもしないで、

「ビクラマジイ王は眞珠で私達を飼つて下さつた。ビクラマジイ王萬々歳」とくりかへすばかりです。カラン王はよし私だつてビクラマジイ王に負けないうぞといつて、すぐ眞珠を出して白鳥に與へましたが、王様の無慈悲な行ひに腹を立てた白鳥は眞珠を食へようともしません。カラン王は怒つて、

「私がビクラマジイ程親切で偉くはないといふのか。」とせめますと、妻の白鳥が、



「王様ともいはれる方は罪もない弱い者を捕へて、牢へ入れるものではありません。私のやうな弱い者をいぢめるものでもありません。もしもビクラマジイ王がこゝに居らざらば、きつと

すぐ私だけは許して下さるにきまつてゐます。」と、答へました。

これをきいてカラン王は仕方なく、妻の白鳥だけを籠から出してやりましたが、夫の方は許しませんでした。妻の白鳥は泣く／＼もとへ引き返して、ビクラマジイ王の所へ来て今までの事をすつかり話して、

「どうぞ王様のお力で、私の夫が自由に成るやうにお助け下さいまし」と頼みました。

慈悲深いビクラマジイ王は、これをきいて大そう可哀さうに思ひ、すぐ助けに行かうと決心しました。

そこで王様は、わざと下男の姿をして白鳥に案内させて、カラン王の宮殿へ参りました。それから白鳥を外に待たせて置いて、自分一人で宮殿へ這入つて行きました。

「私はビクルと申す者です。どうぞ王様の家にお呼び下さいまし。」と頼

みました。カラン王は、これをきいて、大そう驚きました。魔法遣はマントを振つて百圓の金を出してカラン王に與へました。

ビクルは何もかもすつかり見てしまひました。そこでいよ／＼白鳥の夫を助ける決心をしました。ビクルはその翌朝、まだ暗い内起き上りました。それからナイフで自分の體の所々へ傷をつけました。次に胡椒と鹽とカレー粉とをませて一種の香料をこしらへました。さうしてその香料を自分の體中へ塗り込みました。

五八
みました。カラン王はこの男がビクラマジイ王だとは気がつかず、大そう立派な男だと思つてすぐ家來として使ふ事になりました。下男のビクル實はビクラマジイ王は、大そうよく働きましたので、カラン王のお氣に入つてやがて近侍になりました。

ビクルはカラン王が毎朝百圓の金を人民に分け與へるのを不思議に思ひました。何所からあの金を持つて來るのだらう。これには何か秘密があるに違ひ無いと思つて、或る朝そつとカラン王のあとをつけて行きました。それは知らないカラン王は、いつもの通り小山を登つて魔法遣ひの住家へ這入りました。そこにはフライ鍋に油がジイ／＼沸いて居ました。

王様はすぐその鍋の中へとひ込みました。すつかり王様の體が油揚げになると、魔法遣はつまさつにそれを食へ、やがて體だけ變つても死ひをいひながら、傷口へ密着や鹽が染み込んでひり／＼しました。しかしビクルはじつと堪らへました。

すつかり用意が出来たので、ビクルは小山の上の魔法遣ひの住家へ忍んで行きました。フライ鍋には油がジイ／＼沸いて居て魔法遣はまだ寢臺の上に横になつて居ました。ビクルが這入つて來たのを見て、いつもの通りカラン王が來たのかと思ひましたが、さうで無いのを知ると、

「お前は誰だ？」と、とがめました。「私は今朝王様の名代に來ました。どうぞ今朝は私をフライにして食べて下さい。」と、ビクルは答へました。

「いや、それはいけない。私はカラン王と約束がしてあるのだから、お前を食べるわけにはゆかぬ。」
「しかし私はカラン王よりもつと美味うございます。まあ試に私を食べて御覽下さい。きつとお氣に入りますよ。」

さういふと共にビクルはいきなりフライ鍋の中へ飛び込みました。ジイジイと油が體へ染みて来ると、胡椒や鹽やカレー粉の香りがブン／＼して来ました。何とも云へぬ美味さうな香をかいて魔法遣は堪らなくなりました。さうしてビクルの體がコンガリと狐色に揚がるのを待ちかねて、直ぐ一口食べて見ました。

ところが、まあその美味事と云つたら、魔法遣は今まで、これほど美味い御馳走を食べた事がありませんでした。そのはずです。カラン王はたゞ體をフライにするだけですが、ビクルのは香料が塗つてあるのですもの。丁度皆さんがフライや天麩羅をたゞ食べるよりも、大根卸をつけたり、ソースをかけたりにして食べる方が美味しいのと同じです。魔法遣は夢中でビクルの體をすつかり食べてしまひました。それから骨を並べてお暇ひをしながら夢をお

も困つたのはお金です。約束通り百圓のお金を人民に分けない内はカラン王は朝飯を食べる事が出来ません。その日は自分の手元のお金を集めて、やつと約束を果しました。しかしその翌日からは一文の金もありません。人民は相變らず眞ひに來ます。カラン王は、その日は一度も御飯を食べる事が出来ませんでした。その次の日も同じ事です。カラン王はすつかり瘦せてしまつて、いつたりしてしまひました。そこへ這入つて來たのはビクルです。『王様。あなた様は何故御食事をなさいませんか。』『私は毎朝百圓のお金を人民に分け與へ



ンボンボンとうつとビクルが傷も何もすつかり直つて、前よりもピン／＼して生き返りました。魔法遣は大喜びで、『いや實に美味かつた。とても王様なんか比較にならない。これからはお前が毎朝來てくれるといふな。』と云ひますと、ビクルは、『お、に入つたら毎朝でも参ります。しかし私もこんなに美味しくして上げるのですから、その代りに御禮を下さい。』

『お、何でもやる。』
『ではあなたのお不思議なマントを當分私に預けて下さい。』
『成程、このマントは遣るわけにはゆかぬが預けるだけならよい。その代り明日の朝からはきつと來てくれ。』
そこで約束が成り立つて、ビクルは不思議なマントを受け取つて魔法遣の住家を出ました。
(五)

ぬ内は、朝の御飯を食べぬと約束してある。しかし程には今そのお金が無いのだ。』
『ではそのお金を私が差上げませう。その代りに御願ひがございます。』
『お金をさへくれ、ば何でも願を叶へてやる。』
『それではあの白鳥の夫を許してやつ

そのあとへ這入つて來たのはカラン王でした。見ると、いつも油の湧いて居る鍋がもう火鉢から下されて、魔法遣はグ／＼寝て居ます。何うした事かと魔法遣を起して尋ねると、『もう今朝は大そう美味い朝飯を食べたからお前には用は無い。』と云ひました。カラン王はびつくりして、『誰を食べたのです?』
『誰だか知らぬがお前とは比較にならぬ程美味かつた。もうお腹が一杯だから少し寝かしてくれ。』
『ではお金だけ下さい。』
『それも駄目だ。その男にマントを預けてしまつたから。さあ／＼早く歸つてくれ。眠くつて堪らない。』と云ひながら魔法遣はグ／＼眠つてしまひました。

カラン王はすつかり困つてしまひました。誰が自分より先に來て食はれたのかと調べたがわかりません。程よりて下さい。』とビクルは申しました。
『お、そんな願ならすぐ許してやる。』
そこでビクルは、魔法遣から預つたマントを出してカラン王に返しました。カラン王はびつくりしました。
『一體お前は何者だ?』
『ビクルと云ふのは假りの名で實は隣國の王ビクラマジイです。』
カラン王は何もかも察しました。さうして自分の行ひを取直しました。カラン王はすぐ白鳥の夫を籠から出してやりました。待ちこがれた白鳥の妻の喜びは何なでせう。二羽の白鳥は眞白い翼を揃けて、聲高く唄ひながら飛んで行きました。
『ビクラマジイ王萬々歳』
『ビクラマジイ王萬々歳』
それを聞いてカラン王は恥かしさうに首を垂れました。さうして白鳥のいふ事は眞實だ。たしかにビクラマジイ王の方が自分より慈悲深くて偉いと思ひました。(をばり)

六〇



石の白の臺上の村の話

宮 島 資 夫

この話のあつた所は、日本地圖を擴げて見ると、すつと下の方の地位にある、南の國のある寂しい海岸の村に起つた事なのです。それが何處の國であるか、またどの村であるかは讀む人々の想像に任せます。あなた方はどうか、自分の好きなやうに、その所の名前や土地の有様を好いやうに考へて見て下さい。

で、その村と云ふのは、前にも云つたやうに、南の方の暖い國の海岸でした。村人の住んでる前の方には、蒼々と澄み切つた、深い海が遠く遠く、眼のとゞく限り美しく平らに擴がつてゐるのです。さうして、後ろの方には、小高い山を脊負つてゐました。

夏になると、濱邊に染いた石垣の塀の上には、黄色い南瓜の花が咲いて、暖國らしい蒼々とした朝の空に、美しい彩りを與へるのです。そして村の男の人はその涼しい朝風を吸ひながら、濱に出て色々な魚や貝を取つてゐます。またおかみさん達は、田圃

や畑に出かけて行つて、種や野菜を働つてゐます。それだから、海のものも山のものも十分にとれるので、村の中はいつも平和で、静かにゆつたりと暮してゐるのです。

冬になつても、北の方を山で圍はれてゐる此の村には、寒い烈しい風は吹いて来ませんでした。南を受けた暖な日が、一日ほかくと村の上に輝いてゐるので、寒中でも野には紫色の菫の花が咲き、濱邊には赤味を帯びた濱大根の花が綺麗に咲いてゐるのです。

かう云ふ風に美しい静かな自然に恵まれた村の人達は、すつとすつと昔のお祖父さんやお祖母さんの時からだん／＼と傳つて來た時のやうに、同じやうな釣竿で魚を釣り、小さな網で地引を引いて漁をして暮してゐました。もつと遠い荒い海の方ではトロール船が海底の砂までも掬つて行くやうにぎり／＼と魚をあさつて行つても、また重い潜水服を來て僅か一本の息綱で海の底へ深く潜つて苦しい思ひをしながら貝を取るやうな事をしてゐる人々があつても、この村の人には何の刺激も與へることがありませんでした。

入江になつたこの静かな海には、荒い波も立ちません。編

さへ垂れると、魚はいくらでも釣れてくるのでした。だから村の人は、この静かな海から離れて、遠い荒い海の方へ出て行かうといふ氣もなく、また冬になると、甘い汁を澤山含んでゐる黄色く熟した蜜柑が、澤山なつてゐる山を越して、向ふの國へ行かうと云ふ氣も起らなかつたのです。かうして静かなこの村の上には、昨日も今日も同じやうな、平和な日が毎日々々音もなく流れて行くのでした。

ところが、ある夏の夕方に、この村の濱邊にまだ見た事もないやうな大變な騒ぎが起りました。それは丁度引汐刻の汐が引き切つて、海の上が登のやうに平らに風いで、西の方の山の上に向つた夕日の光が、その静かな海の上を斜めに長く流れてゐるので、水の面は金のやうにきら／＼輝いてゐる時でした。その静かな海の上に、小山のやうに大きな眞黒な物が浮み出て、さも面白さうに／＼と泳ぎまはつてゐるのです。

與作といふお爺さんが、濱邊に干網を取りに行つた時に、その黒い物を發見しました。七十幾つになるまで、村から一足も離れたことのない爺さんは、最初に突然海の中に現れた

小山のやうな物を見た時には、
本當に息もつもらんばかりに
驚いて、思はず腰を抜かしさ
うになつてしまひました。け
れども、そこは流石に年の效
といふのでせう。やがてその
黒い物は、かねて話に聞いた
鯨であるといふ事に気がつく
と、今度はまた氣狂ひになら
んばかりに喜んで躍り上つた
のです。

「やあ大變な物がやつて来た
ぞ。あの鯨を一疋とれば、こ
の村中に、金の雨が降るやう
なものだ。こりやえらい事に
なつた。」と思ふと、取りに來
た干綱の事なんか忘れてしま
つて、

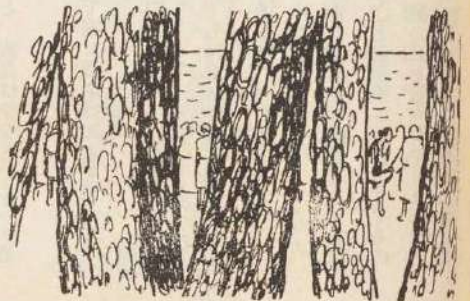


「皆な出て來う、鯨が来ただ、鯨がよ——。」
と、しゃがれた大きな聲を張り上げて、村の方へ馳け出し
て行きました。

奥作爺さんの聲はそれからそれへと傳へられて、やがてこ
の濱邊には、村中の人達が残らず集つて來てしまひました。
それは本當にお爺さんもお婆さんも、若い人だちも子供も娘
も、犬までも飛び出して來てしまつたので、村の中には誰れ
一人残つてゐるものはなくなつてしまつた位です。

不思議な事や、變つた事といふものを見た事のないこの村
の人達は、何か一つ、一寸でも變つた事があればすぐにかう
して集つてくるやうになつてしまつてゐたのです。この前に
も難破船のボートが、あの尖つた底を波の上に現して、濱邊
に流れついた時も村の人ばかりして總出で半日も評議をした
事がありました。それからまた漂流船が流れついた時などに
は、村の人は二日も三日も仕事を休んで遠い國から漂つて來
た人々に色々世間の話を聞くのを常としてゐました。それ
ほどにこの村の人達は、世間を遠く離れてゐたのです。
それだから、いまこの静かな海で、夕日を受けて面白さう

に激いでゐる鯨を眺めた時
も村人の驚きと喜びは、何と
いつて好いか判らないほどで
した。みんなはもうこの鯨が、
自分達の手に入つてしまつた
もの、やうに、濱邊で群がつ
て、がやくと大きな聲で騒
ぎ立てゝゐましたが、鯨はそ
んな事にはちつとも気がつか
ないやうに、いつまでも同じ
やうに、あちらこちらを、悠
悠と泳ぎまはつてゐるので
した。



やがて日が西の山に隠れかけたとき、人々は夜になると家
へ歸らなければならぬ事に気がつきました。さうして明日
の朝まで、鯨がこゝにちつとしてゐるかどうかが氣になり出
したのです。

「あの鯨をよ、どうしておいたらよかつべえ。」

と誰かその時云ひ出したので、今度は急に眞面目に、鯨
をつかまへる事について相談を始めました。けれども今迄に
鯨といふものを見た事もなく、獲つた事もない人達は、その
時になつて急に途方に暮れてしまひました。

「さあどうしたらよかつべえ。」と口々に云ひながらしをれて
ゐますと、その時、
「あれはな、鯨といふもので突くだといふでねえかい。」と源
七といふ若い男が、どこかで聞いた話を思ひ出したやうに云
ひ出しました。

「突くなら、庄屋がとこの槍でも好いでねえか。」とすぐと
茂八と云ふ男が云ひました。

「バカ言へよ、鯨といふのはな、一度うんと突き立つたら、
もう抜けねえやうに出來てゐるだ。槍ならお前、ズボく突
くだけで、すぐと抜けてしまふでねえか。」と源七は利口らし
く言ひ聞かせたのです。

「さうかなあ、はあ、でもこの村に鯨なんかねえだもの仕方が
ねえでねえか。」

「鯨がなかつたら獲れねえだかな。」と、意々一同はこの眼の

前に浮んでゐる、折角の寶物を取逃してしまはなければなら
ないといふ思ひにおそはれて、口々にそんな事を云ひながら
けつそりとしてしまつたのです。

「そんなら仕方がねえ、どこさか銚のある所まで、急いでい
つて借りて来て貰ふべえよ。さうしてそれが来るまで、あ
の鯨を逃さねえやうにする事を考へるだ。」と與作爺さんは年
寄だけに分別ありけにいひますと、皆なはやつといくらか活
氣づいて、

「ほうたら、源七に頼んで借りて来て貰ふべえよ、だがよ、
どこさ行つたら銚があるべえ。」

と、茂七がいひました。

「なによ、山あ越えて行つてよ。それでなければある所まで
行くだ。三日か、つたつて四日か、つても、鯨一疋獲つて見
ろ。何千兩つて云ふ金が入るこんだ。なに構ふ事があるべえ。
だからよ。源七、汝はこれから早く行けよ。俺達あこゝで、
鯨逃さねえかんかうするだから。」と與作爺さんは、すぐその
場から源七を遠い國の方まで、鯨の銚を借りにやりましたの
で、源七は家へ歸つて支度をする、すぐに山を越えて、ま

料は、石臼の上の方を一つと、太い綱をある限り持つて来る
やうに云ひつけました。

村の人は急いで家へ歸ると、太い綱と、石臼の上の方を一
つつつ抱へて、濱邊にやつて来ました。その時はもう、太陽



が山の蔭に沈んで、金色の雲の光がだん／＼と薄れて行くや
うになつてゐましたが、鯨は丁度結へられるのを待つてゐ
るやうに、靜かな波の上をまだ悠々と泳ぎ廻つてゐるので
した。やがて舟は下されて、何人かの若い男が乗り込むと、
鯨の後の方にそつと廻つて行きました。さうして長い長い綱

六六
だ見た事もない國の方へ旅立つて行きました。

濱邊ではそれからまた長い間、鯨をどうしてつかまへて
置いたら宜いかについて相談しました。けれども皆なが色々
な事をいつても、どれも實行の出来さうもない事ばかりで、
中々決りませんでしたが、一番最後に、喜六と云ふ男が、

「かうしたらどうだつべえ、村中の繩を持つて来てよ、鯨の
胴中をぐる／＼巻くだ。さうして濱邊へつないで置いたら、
鯨だつて逃る事は出来なかつべえ。」といひました。すると、
「濱邊へ繋いでおくつて、われ何につなぐつもりだ。」と茂七
が聞き返したので、

「うむ、さうだな」と喜六は、また困つたやうな顔をしま
した。

「好い事があるだよ。」と今度はお直と云ふ女が口を出し乍ら
「皆なが家からよ、あの石臼の上の方だけ持つて来てよ、あ
れに繩を通して置いたら、碇みたいになつて動く事が出来ね
えでねえか。」と云ひますと、

「それは好い考へだ、お直どんはえれえだ。」
與作爺さんは飛び上つて賛成しました。さうして、村中の

で大きな身體をぐる／＼と巻いてしまひました。日の暮れる
頃には、長い綱が濱邊の方に、百五十本も引かれました。

それは丁度あの、此頃外國へ行く人を船へ送つて行く時青や
赤の細長い紙を船の上から澤山投げて、見送人が一つ一つそ
れを持つてゐますが、まああ

あいふ風にと云つたら好いか
鯨の身體につながれた澤山の
綱の端は、濱邊に置いた石臼の
穴に通されて、蜘蛛の巣のや
うにも見えるのでした。

村の人はその綱をすつかり
石臼に結へてしまふとほとと
安心しました。いくら大きな

鯨でもそれだけの石臼を引つ張つて海の中へ逃けて行く事は
出来ないと思へたからです。さうして皆な集つて、もう自分
達の手の中に入つてしまつたやうな、大きな黒い體軀を眺め
てみんなは聲を合せて「ばんざーい」といひながら手をた
いて自分達の家へ歸つて行きました。若い人達の中には、も



六八
 う何千圓と云ふ大金
 が、この村に降つて
 来たもの、やうに喜
 んで、お酒を飲んで
 大騒をする人さへあ
 ったのです。
 翌朝になると村の
 人達は皆ない云ひ合せ
 たやうに早くから起
 き出して、ぞろ／＼
 と濱の方へ歩いて
 行きました。白い綺
 麗な砂の道には、南
 瓜の太い蔓が這つて
 りて、青黒い大きな
 葉は石垣の肌を隠す
 やうに繁つてゐまし
 た。そして朝の中だ

け開くあの黄色い大きな花が、その朝も晴れ渡つた静い空の
 下に美しく咲いてゐました。人々は涼しい風の吹いて来る海
 の上に、昨夕のやうにちつととしてゐる小山のやうな大きな鯨
 の姿を頭に描きながら打ち揃つて濱邊に出て来たのです。

所がどうでせう。海の見える所まで来て、ずつとみんなが
 波の上を見渡すと、昨夜と違つて満潮になつた海の水は、漫
 漫と岸邊を浸し、風が渡つた水の上に朝日はきら／＼と晴や
 かに輝いてゐましたが、小山のやうに大きかつた鯨の姿は一
 晩の中に消えてしまつて、影も形も見えなくなつてしまつて
 りました。

「やつ大變だ。」と與作爺さんは先づ第一に大きな聲を揚げま
 した。それと同時に、揃つて来た人達の顔に、失望の影が浮
 んだ事は云ふまでもありません。

「あれだけ石臼をつけておいたに、どうして鯨は逃げたやら
 う。繩を抜けてしまつたのか知ら。」と人々は口々に云ひなが
 ら、濱邊の方へ下りて行きました。さうして、昨日石臼を置
 いた處まで行つて見ましたが、上げて来た潮は丁度その
 邊りまで、一ぱいに打ちよせてゐて、石臼も綱の影も、水の

中にも見えないのでした。

「あゝこれですつかり判つた。」と與作爺さんはみんなの顔を
 見渡しながらいひま。

「なう皆なよ、昨夕石臼をこゝに置いた時は潮が引いてたか
 ら、白が重いで鯨も逃げられなかつた。所がな、夜の中に
 潮が上げて来て、白が水に浸つて軽くなつたもんで、鯨は白
 を引つぱつて逃げて行つたに違えぬえだ。こりや全く皆なの
 算用違えだからどうも仕方のねえこんだ。」と、手の中に入つ
 たも同然な、莫大な寶物を逃してしまつた悲しさをまぎらす
 やうにいつて聞かせました。

「さうだかなあ、俺等が気がつかかなかつたから仕方のねえ
 こんだ。」と村の人達は口にはいひましたが、それでも恨めし
 さうに又た沖の方を眺め返しました。けれども靜かに風いだ
 海の上には、朝日がきら／＼と輝いて、涼しい海風がそよそ
 よと吹き渡つてゐるばかりで、鯨は勿論、白や綱もどこへ行
 つたか綺麗に見えなくなつてしまつてゐました。

村人は昨夕の喜びに引きかへて、みんな落膽した顔をして
 黙つて家々に歸つて行きました。遠い國へ鎧を探しに行つた



源七は急いで與作爺さんの家へやつて来て、
 「鯨はどうした？」とまた尋ねました。すると爺さんは如何にも悲しそうな顔をして、

「上ヶ朝が鯨も石臼もさらつて行ってしまった。」と答へました。

源七はそれを聞くと、雷にでも打たれたやうに、一時に氣落がして、「うん」といふと同時に氣を失つてしまひました。

與作爺さんが慌て、水をかけたり何かして介抱したので源七は間もなく息を吹き返しましたが、それから後しばらくは氣拔のした人のやうになつてゐました。

静な村の家々にあつた石臼の上臺は、その時限り一つもなくなつてしまひました。そして餘りがつかりした村の人達は再びそれを作る氣力もなくなつてしまつたのです。それだからそれから後その村では、どここの家へ行つても石臼の上臺は一つもなく片輪になつた下の方ばかりが寂しさうに轉つてゐるのです。これは、日本地圖の下の方にある、暖い國にあつた村の話です。その國の方へ皆さんが旅行したら、石臼の上臺のない村を探してごらん下さい。きつとどこかで出會ふに違ひありません。(なほり)

源七が歸つて来たのは、それから四日ほど経つてからでした。源七は漸く、三四十里ほど先の海濱の村で、銚と云ふものを探し出して、高いお金を出して買つて来たのです。彼はこの銚を持つて歸つて、あの鯨をつかまへたら、どれほど大金が入るか、それから功勞のあつた自分がどうなるか、と云ふやうなことを空想しながら、夜を日に繼いで急いで歸つて来たのです。さうして村に入ると、誰れに會つても皆な濕り切つた顔をしてゐるので、

「鯨はどうした？」と會ふ人毎に聞いて見ますと、その人達は云ひ合せたやうに。
 「與作爺さんに聞いて見ろ。」と同じやうに答へました。そこで

子供の唄 (推選)

都外川 淳

をーごろ をごろ
 あの子も踊れ
 この子も踊れ
 お月さん見ながら
 皆で をごれ
 うーたほ うたほ
 あの子も歌へ
 このも歌へ
 お月さん見ながら
 皆で うたへ



説傳 織姫姉妹 (肥後の話)

藤澤衛彦



身体がたまりませぬわ。さあ私
の着をお重ねなさいまし。」
「妹がかう言つて、後母さんに
憎がられてゐる姉さんを庇ひま
すと、姉は姉で、兎角、連娘だ
といふのでお父さんに邪慳にさ
れる妹を勤つて、後から、無
理な御用を命じられるのを助け
てやりました。」

「まあ、また新摺りですの、さ
あ代りませう、後は私が受持ら
ますわ。」

かう言つて、姉が袴を割つて
をりますところへ、びよつこり、
お父さんが歸つてまゐりました。

「長女や、お前ま何をやつてゐるんだ。お
前は家の大切な後編ではないか。……これ
これ、下女はどうしたんだ。あの厄介娘の跡
曲りめ、横着してやがるのだらう。」とお父
さんが怒りますのを、悲しうに長女は制め
まして、
「いえ、お父さん、私、運動が足りない
ので、下女に頼んでやらしてもらつたのです
わ。」と、彼女が言ひわけをしますと、
「よし、お前が割つたわけは、別に彼
奴にやらせるからいゝ。」とお父さんが申しま
した。
「さうか、それならいけれど、だが彼奴は、
断りなしに怠けてゐたんだ。その罰として、
今日中に、今十把の薪を割るんだ。」
それで、仕方なく、二人の姉妹は、お互ひ
に慰めあひながら、夜おそくまで、切を割るの
でございました。その心を知らず長女の後
母さんは、
「へん、わざと働き振を見せやがつて、それ
で下女をいびり殺すつもりなんだらう。私は、
そんな人非人に出してやる御飯を持ちあはさ
ないんだから。」と言つて、翌日は何も食物
を長女にくれませんので、妹はすつかり、思
つて、自分の食事を減らして、すつとお掃除
をつくり、それを姉さんのところへ運ぶので

肥後國阿蘇郡長陽の里に、昔、長女下女と
いふ大層仲のよい二人の姉妹がありました。
下女は後母さんの連娘で、長女は前母さんの
娘でした。それでも、二人は、眞の姉妹より
も仲がよくて、お互ひに思ひ思はれて情をつ
くしあひました。
「姉さん、まあ、あなたの着物の袖は、袖で
はなくて裏ぢやありませんか。それではお
した。
こんな風ですから、二人の姉妹は、同じや
うに、度過ぎた労働と、足りないがらの食
事とでだん／＼瘦せ細つてまゐりました。
それを、お父さんは、下女の来たせゐから
だと、いゝ／＼下女を憎み、お母さんは、長
女のゐるため下女が邪慳にされ過ぎるからだ
と考へて、一層長女を憎みました。
それで、或時、下女の後父さんば、わざと、
町から毀れた機織の道具を買つて來、一日
に一反の機を繰れと命じました。トンパ
ン、トンパメンと妹が、一所懸命に機を織つ
てなりますと、その音を、姉の長女が聞きつ
けて、そつと妹の室を覗きますと、いとしい
いとしい妹は、毀れた機織とは知らないで、
一心不乱に機を出してなりますので、悲しく
て、長女はあばれな曲節で歌をうたひ出し
ました。
トンパメン、トンパメン、
織姫さんは、
こはれた機織で機織りなさる、
いくら織つても織姫さんは、



のだと思ひ、
「畜生つ、あくまで機に頼つかうとしやアが
る。」と、大變に怒つて、下女を、引摺つて行
つて、溜池に投げ込んでしまひ、そのあとか

野の溜池に行くと、水底の方で毀れた機織で
機を織つてゐる篋の音が聞えて、たまには、
織姫の美しいそして悲しうな姿も見られる
といふことでございます。(なほり)

機が壊れずに機織りなさる。
トンパメン、トンパメン。
その歌を聞いて、お父さんは、妹のうたふ
りまして。
その留守の間に後母
さんは、此頃、ちつと
も御飯をいたゞかない
ので飢死しうになつ
てゐた姉の長女を引摺
つて行つて、これは又、
廣野に捨てしまひま
した。
姉の捨てられたとこ
ろが今の長陽村の長野
で、妹の捨てられた溜
池が、今の長陽村の下
野の溜池ださうでござ
います。それで、それ
からこつち、夕暮方に
は長野のどこかに悲し
うな歌聲が聞え、下



猿のねのひ

齋藤佐次郎

むかし、越後の國の乙寺といふ山寺に一人のお坊さんがゐて、毎日法華經といふ有難いお經を讀んでゐました。深い、山の中ですからしんとしてゐて、聞えるものは谷川の水の音と、時々鳴く鳥の聲だけでした。

ところが、お坊さんがお經をよんでゐると、山の奥から二疋の猿が出て来て、お寺の縁の上にもよこなんと坐つて、首をたれて有難さうに聞いているのです。

毎日きつと來てゐるので、ある日のこと、お坊さんは縁側のところへ出て行つて、「猿や！ お前にもお經のありがたいことがわかるのか。お前達にもお經を書いてやらうかね。」と、半分は戯言のつもりでいひました。

すると、二疋の猿はうれしそうに齒をむき出して、兩手を合せて拜むやうな恰好をして、

お辭儀をしました。

「はッは、うれしかお前達は去番かい。」

さういつてお坊さんが訊くと、「二疋の猿はさうですと答へるやうに、キャツ／＼とないて、またお辭儀をしました。

「お經は、もう今日はおしまひだよ、また明日お出で。」とお坊さんがいつたので、猿はお寺の縁から立上りました。そして、もう一度お坊さんにお辭儀をして歸つて行きました。

二

翌日になりました。お坊さんはいつもの通り佛様に向つて、法華經をあげてゐました。すると、お寺の庭で切りと澤山の猿の啼聲がするのです。お坊さんは不思議に思つて、お經を中途でやめて縁側の方へ出て行つて見ますと、何百疋といふ澤山の猿が集つて來てゐるのです。お坊さんはびつくりしてしまひました。

しかも、その何百といふ猿が、口にみんな楮の皮をくはへてゐるのです。

「おやッ！ みんな楮の皮を持つて來たのか！」お坊さんが大きな聲でいつたので、いつもの二疋の猿が、

お坊さんの立つてゐる縁側の下へ來ました。そして、兩手を合せてお辭儀を一つして、持つて來た楮の皮をお坊さんの前に置きました。それから二疋の猿は後を向いて、仲間の方に向つて何か命令するやうに「キャツ／＼」と二聲叫びました。すると、何百といふ猿かどつと一度に集つて來て、みんな持つて來た楮の皮をお坊さんの前に置いたので、忽ち山のやうになりました。お坊さんは初めて其の譯がわかりました。「成る程、昨日私がお經を書いてやらうと言つたので、それで楮の皮を持つて來たのだな。よし／＼、書いてやるぞ。書いてやるぞ。」

お坊さんは猿の志に感心してしまつたのです。猿にもお坊さんの言葉がわかつたと見えて、口々にうれしさうな叫聲をたてました。そして、みんなぞろ／＼と山の奥の方へ歸つて行つてしまひました。

お坊さんは楮の皮をすかせてそれで立派な紙をつくりました。それから約束通り法華經といふ有難いお經を書きはじめました。二疋の猿は毎日縁側のところまで來て、ちよこなんと坐つて、お坊さんが書いてゐるのをうれしそうに眺めてゐ

ましたが、毎日来る時には山からおいしい木の實や、果物を
持つて来て、お坊さんにあげました。

かうして毎日々々同じやうに日が経つて行きましたが、あ
る朝、どうしたことが、毎朝来る筈の猿が見えませんでした。

「どうしたのだらう。病氣にでもなつたのかしら。」

お坊さんは心配しましたが、明日はきつと来るに違ひ
ないと思つて、明日になるのを待つてゐました。

ところが、その翌日になつても猿はやつぱり来ないのです。

「いよくどうかしたに違ひない、行つて見て来てやらう。」
と思つて、お坊さんは山の奥の方へ行きました。さうして、

あつち、こつちと見て歩きました。森の中や草敷の中や、谷
間などを探して歩きましたが、たうとう見當りませんでした。

そのうちに日が暮れかけて来たので、お坊さんはもう仕方
がないとあきらめてお寺の方へ歸りかけました。しかし、随
分奥深く入つたので、お寺へ歸るにはなかく、時間がかかり
ました。

お坊さんは大きな杉の樹が並んでゐる下を通りかゝりまし
た。淵側に懸崖が、ばい茂つてゐるので、唯氣なく其處を見

ると、深い穴がありました。

「ずるぶん深い穴だなア。」と思はず叫んで、お坊さんが穴
の中を見ると、二疋の猿が落ちて死んでゐるのが見えました。

「おやッ！ 猿ぢやないかしら。」

お坊さんはびつくりして、よく中の方を覗き込みました。
日の暮れ方で薄暗くはなつてゐますが、それはたしかにいっ
もの猿に違ひないのです。

穴のふちを見ると、山の芋が置いてありました。

「可哀さうに、山の芋を掘つてゐて、穴に落ちたのだな。」

とお坊さんは思ひました。お坊さんは涙をばい目ためて
猿の死骸を眺めてゐました。

その翌日、お坊さんは村の人を大ぜい頼んで来て、二疋の
猿の死骸を穴の底から引あげました。それからお寺の裏にお
墓をこしらへて、お経をあげて丁寧に葬りました。

こんな譯で猿が死んでしまつたので、お坊さんはお経を書
くのをそれつ切り止めてしまひました。そして、それまでに
書いたお経はお寺の入口の太い柱を彫つて、その中に入れて
納めてしまひました。





それから四十年たちました、乙寺のお坊さんも、もう八十歳になりました。

すると、ある日のこと、紀射高朝臣といふ人が大勢家來を從へて、山を登つて、お寺へたづねて來ました。

紀射高朝臣はお寺の入口に立つて、

「頼む、……頼む、」

といつて、案内を求めました。

奥から、もう腰が曲つてよほしくなつたお坊さんが出て來て、

「何か御用ですか。」

と、きゝました。

「私は今度お上のいひつけでこの國を守めに來た者ですが、もしや、このお寺に四十年ほど前に書きをへすにしまつたお經はありはしませんでせうか。」と、紀射高朝臣は丁寧な言葉で尋ねました。

お坊さんは首をかしげて靜かに考へてゐましたが、やがて、

「お、あります。左様、もう四十年にもなりますがな、て、お坊さんの前に手を突いて、うやくしくお辭儀をしました。

お坊さんはびつくりしてしまひました。しかし、その時の猿が人間に生れ變つて自分にお禮に來たのですから嬉しくてなりませんでした。お坊さんは、むかし、縁側のところへ來てゐた猿のことや、それから自分が山の中へ探しに行つた時のことなどをふと思ひ出しました。そして、その猿が、こんなに立派な人となつたのかと思ふと、うれしくつて、一しよに涙をこほしました。

「あ、あの時の猿があなただつたのですか。」

お坊さんはさういつて、もう一度紀射高朝臣を見ました。

「私はあの時の頼むを是非果したいと思つてわざ／＼この國を守める役人となつて來たのです。あの時のお經の残りを是非みんな書きあけてお寺へ納めたいと思つてゐます。」

紀射高朝臣はさういつてお坊さんにお願ひしました。そして、自身でそれからお經の残りを全部寫してお寺へ納めたばかりでなく、尙同じお經を三千部も人に寫させてお寺へ奉納したといふことです。(なほり)

山の中から不思議な猿が出て來て、お經を書いてくれと頼むものですから書いてやりましたが、中途まで書いてやつたところが、可哀さうに死んでしまつたので、私もがっかりしてそれなりにしたのがあります。」

と、いひました。

そしてお坊さんはその事を知つてゐる紀射高朝臣を不思議さうに見ました。

「それでは今でもそのお經がありますか。」

「はい、あります。それ、そこに見える入口の太い柱の中に納めてあります。」

紀射高朝臣はお坊さんにはれて、木目が出た古い柱を見つめてゐましたが、はらくと涙をこほしました。

「お坊さま、四十年前にあなたにお願ひして法華經を書いていたゞいたその時の猿は、實は私だつたのです。私はあなたのお力でお經を書いていたゞいたために、その功德で人間に生れることが出來たのです。何といつてお禮をいつていゝか私にはわかりません。」

さういつて、紀射高朝臣は、また、はらくと涙をこほし

金の星の歌

野口雨情

あけの明星

金の星

ビカ ビカ

ビツカリコ

豊年よ

今年は 豊年よ

宵の明星

金の星

ビカ ビカ

ビツカリコ



大漁

今年は大漁よ





幼年詩
若山牧選

なすび (賞)

和歌山縣那賀郡 有本サカエ
南野上校 尋三

むらさきの
なすびを
七日ほど
つけたら
青なつた
びつくりした

評、美しいおもしろいさうなお漬物、僕もたべたい。(牧水)

馬 (賞)

山梨縣小淵 鷹野なか子
深 校 尋六
むかふの鼻のくろくで
馬が草をむしやうと

たべながら 尾をふつてゐる
評、馬も鼻もほつきり見えてよい景色。(牧水)

影法師 (賞)

香川縣木田郡 西田富巳子
水田校 高一

お日様つててる
私ですわると
神様が臺で
私の絵をかいた

評、ふざけてる様で、まじめで、面白い。(牧水)

さむしい家

山梨縣北巨摩 井上 直義
都菅原校 尋五

七里岩のま下に
片嵐も竹やぶに
まかれてゐる家
さむしかろ

評、支那の繪にある様な山や家でせう。ほんとにさむしさう。(牧水)

嫁様

長野縣下伊那 菅沼百合子
郡神稻校 尋六

赤いかんざしちよつと
さして

綴方

編輯部選

うちにをつめじろ (賞)

福岡縣山門郡 津留 二郎
垂見校 尋四

うちにおつためじろがにけてから、もう二年になります。さうぢの時などに、あのめじろの入つてゐた、かゝが出てと、あのめじろのことを思ひ出します。この頃、うちの、にはにめじろがきたので、あのめじろではないかと思ひました。

有馬さん (賞)

東京淺草練 關 好一
成校 尋五

有馬さんは僕の級の四の側の一番前に居ました。そして、誰がどんな事をしてもたゞ笑つてゐて、ちつともおこりませんでした。よく半紙や綴方用紙をかりに来て、もつて歸りながら、「明日かへすからぬ。」といつて、にっこり笑ひました。その笑つた顔は今でも目に残つてゐます

昨日の夕方 (賞)

福岡縣山門郡 津留 濤雄
垂見校 尋四

昨日はうちのものが、家とくらとのまんな中で、夕方はんをたべた。しまつてからそとへでて、空をながめて見ると、きれいな月が出てゐた。それで私はすぐ、ああどうえうをつくりたいなと思つて、どうえうをつくつた。

あれく月が出た
向ふの森に月が出た
まゝるいく

十五夜お月さん
からだもたすに
かほばかり

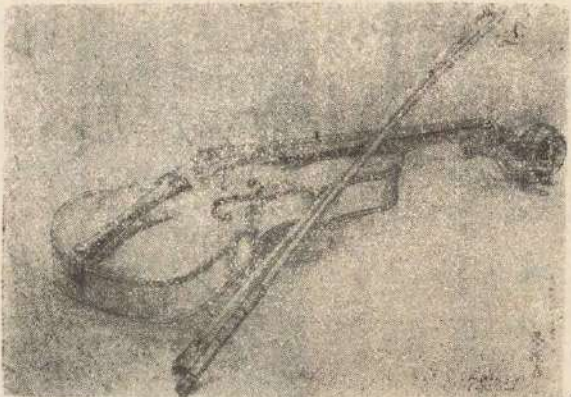
私があるけば
あなたもあるく

あゝ朝

東京市本郷區 日向 かな
駒込千駄木町

らでんとうがきえてゐた。まつくらだつたので、お母さんにろうそくをつけていただいで、かみきれにかきうつした。そしてすぐねた。

今から何年も前の大嵐のやんだあゝ朝でした。その時分私の家は小石川にありました。兄さんと私は夜明けですたけれど、夜中ひどかつた嵐の爲にすつかり目がさめてゐたので外へ遊びに出ました。出で見たらまだ外は薄暗がりました。けれど嵐のやんだ朝はなんともいへないいいきもちでした。きりの様な雨が少し降つてゐたので、私達はかさをもつて来ました。さうして裏へ来て見るとおふろばのトタン屋根がふきとばされ 道ばたにおつちてゐました。かわらも一ぱいおちてゐました。道に植えてある木もたくさんふれてゐました。それからどこへ行くともなく行くと、白山様の方へ行く道にさ



ヴァイオリン (賞)
岩手縣西磐 渡邊 山彦
井野平泉村

どこのお人か知らないが
恥かしそうにうつむいた
晴れの姿の嫁様が
ここの峠を越えました
評、此處の峠を越えましたが、がいよ。(牧水)

くもの絲

香川県木田郡 國方ハルエ
水田校高一

くもの絲細い
水かけても
落ちない

評、水かけても落ちない、は面白い、絲が
さらさら光つたでせう。(牧水)

長いしりほの猫

千葉縣山武郡 平新一
東金校尋六

親猫子猫
しりほが長い
親がながけら
子も長い
親子揃つて
しりほが長い
評、二つつないだら、ニヤンと鳴いた。(牧水)

教室

香川県木田郡 鹿野 浪幸
田校高一

教室の窓から
梨の木が見える
評、何でもない様だが、静かな心持を持た
ないとこの歌は作れません。(牧水)

牛

茨城縣北相馬 横島安之助
郡首生校尋六

岩井の牛は
をす牛だ
岩井の牛が
ないてゐる
評、静かで長閑かに、そして何處まびし
い佳い歌。(牧水)

暗夜

香川県木田郡 香西清
田校高一

やみの夜
裏の柿の木に
風がない
評、うまいもんだ、然し少し子供らしいきが

てしまひました。

白山様の境内には大きないぢょうの木
がありました。そしてその實はよくじゆ
くしてゐる最中でしたから、私達は大き
ろこびでひろふ爲めに行きました。
くらやみ坂にきて見るとのほりきつた
所に大きな木が横倒しになつてゐました
私達はするぶん大きな木がたふれてゐる
と話しながら枝をこぐつて木の向へ出よ
うとしたひょうしに、ほつかぶりをして
黒い着物をきた人が木の間からにゆつと
出て來ました。まだ朝早くつて人通りが
ないのに急に人が出てきたので、私達は
するぶんびつくりしてしまひました。そ
の人は電信柱なんかを直す工夫でした。
(以下略す)

おばあさんの家に行つた時

東京市本郷區 日向 もも
駒込千駄木町

あたしはお人形さんをだいて電車にの
りました。ばあやお姉様は、大きい荷
物をもつてゐました。あたしはおばあさ
んの家に行く所なのです。その時はなん

馬に飲ませた。すると暫くして、「ヒー」
とないて、やうやく立上つた。

犬

茨城縣眞壁郡 吉田 みき
若柳校尋四

私は昨日まちやんと二人でしたへ遊
びに行くと、犬が来て私がいけさうを
つみに行くべと思つてかけて行くと、犬
が私の足をくひつきました。
それなので私が「こんちきしよ」と云ふ
と、よけいに着物をくわへてちやれます

でもなかつたのですが、おばあさんの家
についた時、淋しい氣持がしました。お
ばあさんはきびしい、きちやうめんな人
でした。ばあやお姉様も色々あたしに
いつてお家へかへつていききました。あた
しはおばあさんの家にあづけられたので
す。淋しくて淋しくて泣きたいのです
だまつてがまんしてゐました。夜ねてか
らお姉様やお兄様や妹の事を思ひ出して
家へかへりたくて泣いてしまひました。
その内に泣きぬいりをしてしまひました
朝おきて見たら目がはれてゐました。

馬

大阪府下東成 大塚 好之
郡小路村小瀬

「下」といふ音に僕は外へ出て見ると、
町の真中で馬が倒れてゐる。そばには馬
方が二三人わい／＼と言つてゐる。周囲
には人々が大勢見てゐる。馬方の一人は
眞赤におこつて、鞭でビシヤ／＼とた
いてゐる。
馬は、時々「ヒー」となく。そのうち一
人の馬方が、桶に水を入れて持つて來て

さうすると、まちやんがそこになが
あつたので、それではたくと、かなしけ
にはえて家へ行つてしまひました。それ
なので私とまちやんで、したで遊んで
ゐました。こんどはあんまりさびしいの
で、上へあがつてしまひました。すると、
みんなが、わあ／＼とさわいいで居まし
た。

夜の買物

臺北市表町 丸山 泰夫
一ノ五七



権 「化物なん
か出るもの
か。」と思ひ
ながらも、
東區 此のさびし
京區 芝田 道にくる
市三 此のさびし
市三 感じがする
下駄をわざ
と引きづる
ので、時々
石につまつ

すゞめ
しいきだ(牧羊)

山梨縣北巨摩郡菅原校尋五 藤田 健一

すゞめが六羽
軒から枝へ
枝から枝へ

ものがあつたと
いそいで一羽がとんでつた
みんなもあとからとんでつた
いつたがおそくてだめだつた

つばめ

和歌山縣那賀郡
南野上校尋四 上芝 弘義

つばめはいけに
とんできて

あついか
おしりをつけては
とんでゆく

だん／＼ひろがる水のもの
すいすいとんでる
つばくらめ

けむり

山梨縣北巨摩郡菅原校尋五 森川きよ子

はてもなく
すみきつた

そらにあがるけむりらは
うれしい／＼
そのほれと
おしつこだ

水

米賀ちやう

橋の下に
流れる小川
きれいな
水にはいりたい
足をあらふと
涼しかる

みそはぎ

茨城縣猿島郡
櫻井校尋五 齋藤しげる

庭のみそはぎ
ちらほら咲いた

光ちやん(賞) 藤東州大造
市大山通り 清



八六

うちのすゝむちやん

東京日本橋濱町小學校尋三 小林 健次

うちのすゝむちやんは、ほん
とにかわいらしゆうございます
目はどんぐりのやうで火さう太
つてゐます。或る時私が字を書
いてゐました。するとすゝむち
やんは紙を持ってきてめちやめ
ちやに書きました。それからた
たみへも書きました。

私がしかりますと「ごめん
ちやい。」と言ひましたので、私
はすゝむちやんのあたまをなせて笑ひま
した。

すゝむちやんはいつの間にか學校と言
ふことをおほへまし。兄さんは。と
言ふと「學校。」と言ひます。ねえさんは
と言つても、やつぱり「學校」と言ひます
お父さんがおつかひに行つた時「お父さ
んは。」ときまますと「學校」と言ひました
ので皆で笑ひました。
すゝむちやんは何にもわからなくせ

にやつぱり笑ひました。うちのすゝむち
やんはほんとにかわいらしゆうございま
す。

昨日

東京府下大井町 浦田孝四郎
大井第一校尋五

本屋へ行つて「金の星はまだ來ない」
と言ふと、向ふの人は「金の星はもう二
三日して來ます」と言つた。二三日して
「金の星はまだ來ないの」と言ふと、本屋

の女は「金の星は來ましたが金の星はま
だ來ません」といつたので、僕は「あつ、
ちがつた。金の星です」と言つたので、
本屋の女は笑つた。僕はさつしを買つて
面白い／＼と言つて讀んで居たらおかあ
さんが来て「べんきやうをしなさい」と
言ふので、おさらひをはじめた。終つて
「今日は幼年詩を出さうかな」と思はず
ひとり言をいつた。

けれどあまりよいのが出來ないので、
明日しようと思つた。では
吉田さんに手紙でも、ださ
うかな—と言つて書き出し
た。



先生(賞) 千葉縣山武郡
東金校尋六 岩崎 孝

それをいそいでポストに
入れて、吉田さんから手紙
のくるのをたのしみにし
て、遊んでる中に、大分日
が暮れて來たので、夜のご
はんをたべて、八時ごろ床
についた。

そして「金の星」を讀みな
がら我れしらす眠つてしま
つた。

八七

ほんにはあの花
上げませう

かうもり

茨城 北相馬
郡香生校尋六 倉持 精一

日ぐれに出て来る
かうもりさんは
ねすみのおばけに
ちがひない

煙

茨城 猿島郡
櫻井校尋四 鈴木 貞次

まつたくけふい
火ばちの煙よ
めしのけむなど
おとなしもんだ

さのこ

茨城 北相馬
郡香生校尋六 鈴木 直

きのこのちいさん
よろしくだ

ひまわり

福島 田村郡
高倉校高一 植木 正雄

ひまわり咲いた
東打いて咲いた
黒い白玉でおてんと様と
ならみつこしながら
咲きました

庭

山形 山邊
小學校尋四 後藤 フヨ

私の庭には
なんにも
ない

山びこ

茨城 猿島郡
櫻井校尋五 関口 ふよ

麥ぶちむしろ
はたいてる
森の山彦
まねしてる

中野さんと高橋さん(賞)

鳥取 氣高郡
鹿野校尋三

村岡 君江

は大ぜいよつてたかつて、
いも蟲をころしてみんなで
それをかついでエンヤノと
の方へもつていきました。蟻は
小さいけれども、中々強い蟲だ
と分りました。

金の舟の題をこら
れた時

東京 小石川
礪川校尋六 鈴木 八重子



ありの穴

東京市 麹町
上六校尋四 渡邊 圭一郎

僕が此の間なか庭へいつて見ると、草
の間に一つの穴がありました。僕はこれ
は何だらうと見てみると、大きな草が
一匹草のかけから出てきて、その穴の中
へはひりました。僕はこれはありの穴だ
なと思つて、棒で穴をほじくりますと、中
から何千といふ蟻が出てきて、僕の着物
にたかりました。僕はおどろいてにけ出
しました。そしていも蟲をつかまへてき
てありのそばへおいてやりますと、あり

私はいつもの様にお友達と學
校を出て皆さんとお別かれし本屋さんの
前の停留場へ足をこびりました。
間もなく停留場へまゐりましたので、
本屋さんののぞきましたら、うれしい事
には岡本歸一先生の畫と『金の星』と言
ふ字がはつきりと目に見えましたので早
く電車に乗りました。
いつもくたびれるのに不思議にちつと
もくたびれないでとうとうお家へつきま
したらお母様が本を奥から持つて居らつ
しやいました。

家の犬

東京市 下谷
根岸校尋三 鈴木 秀男

おきて見るといつもの通り小さいから



サカナヤ (賞)

田中よりこ

だをふつてゐる。えすとよよとこちらを
むいて尻をふつて来る。
あまり小さいのできんじよの人にから
かはれる。
その時は小さいからだをふつてわんわ
んとはえる。
そのやうなはずはじつをかしい。
そして小さい子が通りかるとわんわ
とはえる。ほえる時には一べんうなつて
ほえる。

夜

福島 郡山
第三校尋五 慶 徳 宏

「では、早く歸つておいで、途
中氣をつけてね」と、お母
さんは、ご門まで、おくつて下
さいました。
門を出るとすんだ空に星がキラ
キラと出てをりました。
私はすぐ「金の星」を思ひ出
しました。
いつでも私は星を見るたび
「金の星」を思ひ出します。

野口先生の童謡講演旅行

此月は野口先生が朝鮮旅行からお歸りになつたばかりで、お疲れをいやす爲めに信州千ヶ瀬の御別荘で御休養になりました。それで本月は主に野口先生が本誌講師として各地をお廻りになりました。(記者)

▽日本女子音楽園(東京) 府下澁谷の同園に八月一日より七日間、童謡作法、童謡作曲法、童謡遊戯の三科目について夏期講習會が開かれました。野口先生は童謡の作り方について三日間、本居長世先生は童謡の作曲法について二日間、印牧季雄先生は童謡遊戯について二日間講

話されました。
▽灘 吉小學校(兵庫縣) 八月六、七日の二日間同校に野口先生の一般童謡についての講習が開かれました。同校は関西で有名な童謡の播磨校であるだけ同郷ト講學校の先生方が澤山おいでになりました。同校では遺添野天先生と池尻景助

先生とが上として童謡の指導にあたられてをいれます。別項掲載寫眞の野口先生作童謡の橋は池尻先生の作曲、道添先生が振りをつけて同校で校歌同様に歌はれてゐる童謡です。その虹の橋の童謡と、本居長世先生作曲の「十五夜お月さん」

「青い眼の人影」等を道添、池尻の両先生が講師となつて講習もいたしました。
▽汎愛小學校(大阪府) 東區の同校で八月九日、野口先生の童謡のお話がありました。同校は大阪市のうちでも最も新しい教育を試みてをられる學校であります。丁度其折飯田校長先生は歌本各園の教育を視察して歸られたばかりでした。

犬塚なことを語られました。野口先生、女子師範の校長先生もお見えになつて、印象の深い會でした。
▽中央音楽會童謡講話(東京市) 下谷

大塚なことを語られました。野口先生、女子師範の校長先生もお見えになつて、印象の深い會でした。
▽中央音楽會童謡講話(東京市) 下谷

大塚なことを語られました。野口先生、女子師範の校長先生もお見えになつて、印象の深い會でした。
▽中央音楽會童謡講話(東京市) 下谷

大塚なことを語られました。野口先生、女子師範の校長先生もお見えになつて、印象の深い會でした。
▽中央音楽會童謡講話(東京市) 下谷

大塚なことを語られました。野口先生、女子師範の校長先生もお見えになつて、印象の深い會でした。
▽中央音楽會童謡講話(東京市) 下谷

大塚なことを語られました。野口先生、女子師範の校長先生もお見えになつて、印象の深い會でした。
▽中央音楽會童謡講話(東京市) 下谷

大塚なことを語られました。野口先生、女子師範の校長先生もお見えになつて、印象の深い會でした。
▽中央音楽會童謡講話(東京市) 下谷

大塚なことを語られました。野口先生、女子師範の校長先生もお見えになつて、印象の深い會でした。
▽中央音楽會童謡講話(東京市) 下谷

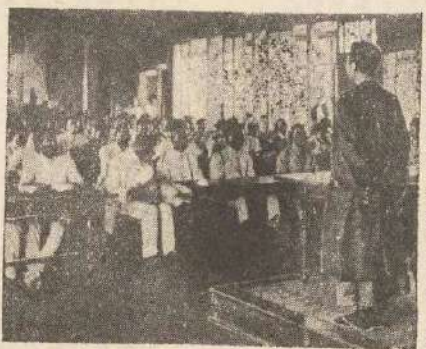
大塚なことを語られました。野口先生、女子師範の校長先生もお見えになつて、印象の深い會でした。
▽中央音楽會童謡講話(東京市) 下谷

大塚なことを語られました。野口先生、女子師範の校長先生もお見えになつて、印象の深い會でした。
▽中央音楽會童謡講話(東京市) 下谷

大塚なことを語られました。野口先生、女子師範の校長先生もお見えになつて、印象の深い會でした。
▽中央音楽會童謡講話(東京市) 下谷

大塚なことを語られました。野口先生、女子師範の校長先生もお見えになつて、印象の深い會でした。
▽中央音楽會童謡講話(東京市) 下谷

大塚なことを語られました。野口先生、女子師範の校長先生もお見えになつて、印象の深い會でした。
▽中央音楽會童謡講話(東京市) 下谷



(水戸市役所楼上で開かれた童謡講演會) 演壇に立てるは野口雨情先生

大塚なことを語られました。野口先生、女子師範の校長先生もお見えになつて、印象の深い會でした。
▽中央音楽會童謡講話(東京市) 下谷

大塚なことを語られました。野口先生、女子師範の校長先生もお見えになつて、印象の深い會でした。
▽中央音楽會童謡講話(東京市) 下谷

大塚なことを語られました。野口先生、女子師範の校長先生もお見えになつて、印象の深い會でした。
▽中央音楽會童謡講話(東京市) 下谷

大塚なことを語られました。野口先生、女子師範の校長先生もお見えになつて、印象の深い會でした。
▽中央音楽會童謡講話(東京市) 下谷

講演の御招聘に應じます

童謡部の講演を各地の學校や子供會から非常に澤山お申込みを受けてをりましたが、御承知の通り野口先生が朝鮮地方を御旅行中でありましたので内地での講演はと先づお断りいたしてをりました。しかし、最早野口先生もお歸りになり御疲勞も癒えましたが、これから童謡部同様、講演の御招聘に應じます。尙精しい事は左の規定を御覽下さいませ。

金の星 講演部規定

金の星は新しい時代の童謡と童謡を普及するため講演部を設けました。野口雨情先生は童謡は沖野岩三郎先生、童謡は野口雨情先生が擔任されます。童謡なり童謡なり、御希望に應じて講師が出張いたします。但し、他に講師のある場合はお断りいたします。講演は先生方のお仕事の都合上、なるべく毎月十五日から二十五日の間に制限いたします。講演をお望みの方は、東京市外田端三五

金の星は新しい時代の童謡と童謡を普及するため講演部を設けました。野口雨情先生は童謡は沖野岩三郎先生、童謡は野口雨情先生が擔任されます。童謡なり童謡なり、御希望に應じて講師が出張いたします。但し、他に講師のある場合はお断りいたします。講演は先生方のお仕事の都合上、なるべく毎月十五日から二十五日の間に制限いたします。講演をお望みの方は、東京市外田端三五

金の星は新しい時代の童謡と童謡を普及するため講演部を設けました。野口雨情先生は童謡は沖野岩三郎先生、童謡は野口雨情先生が擔任されます。童謡なり童謡なり、御希望に應じて講師が出張いたします。但し、他に講師のある場合はお断りいたします。講演は先生方のお仕事の都合上、なるべく毎月十五日から二十五日の間に制限いたします。講演をお望みの方は、東京市外田端三五

金の星は新しい時代の童謡と童謡を普及するため講演部を設けました。野口雨情先生は童謡は沖野岩三郎先生、童謡は野口雨情先生が擔任されます。童謡なり童謡なり、御希望に應じて講師が出張いたします。但し、他に講師のある場合はお断りいたします。講演は先生方のお仕事の都合上、なるべく毎月十五日から二十五日の間に制限いたします。講演をお望みの方は、東京市外田端三五

金の星は新しい時代の童謡と童謡を普及するため講演部を設けました。野口雨情先生は童謡は沖野岩三郎先生、童謡は野口雨情先生が擔任されます。童謡なり童謡なり、御希望に應じて講師が出張いたします。但し、他に講師のある場合はお断りいたします。講演は先生方のお仕事の都合上、なるべく毎月十五日から二十五日の間に制限いたします。講演をお望みの方は、東京市外田端三五

金の星は新しい時代の童謡と童謡を普及するため講演部を設けました。野口雨情先生は童謡は沖野岩三郎先生、童謡は野口雨情先生が擔任されます。童謡なり童謡なり、御希望に應じて講師が出張いたします。但し、他に講師のある場合はお断りいたします。講演は先生方のお仕事の都合上、なるべく毎月十五日から二十五日の間に制限いたします。講演をお望みの方は、東京市外田端三五

金の星は新しい時代の童謡と童謡を普及するため講演部を設けました。野口雨情先生は童謡は沖野岩三郎先生、童謡は野口雨情先生が擔任されます。童謡なり童謡なり、御希望に應じて講師が出張いたします。但し、他に講師のある場合はお断りいたします。講演は先生方のお仕事の都合上、なるべく毎月十五日から二十五日の間に制限いたします。講演をお望みの方は、東京市外田端三五

金の星は新しい時代の童謡と童謡を普及するため講演部を設けました。野口雨情先生は童謡は沖野岩三郎先生、童謡は野口雨情先生が擔任されます。童謡なり童謡なり、御希望に應じて講師が出張いたします。但し、他に講師のある場合はお断りいたします。講演は先生方のお仕事の都合上、なるべく毎月十五日から二十五日の間に制限いたします。講演をお望みの方は、東京市外田端三五

金の星は新しい時代の童謡と童謡を普及するため講演部を設けました。野口雨情先生は童謡は沖野岩三郎先生、童謡は野口雨情先生が擔任されます。童謡なり童謡なり、御希望に應じて講師が出張いたします。但し、他に講師のある場合はお断りいたします。講演は先生方のお仕事の都合上、なるべく毎月十五日から二十五日の間に制限いたします。講演をお望みの方は、東京市外田端三五

金の星は新しい時代の童謡と童謡を普及するため講演部を設けました。野口雨情先生は童謡は沖野岩三郎先生、童謡は野口雨情先生が擔任されます。童謡なり童謡なり、御希望に應じて講師が出張いたします。但し、他に講師のある場合はお断りいたします。講演は先生方のお仕事の都合上、なるべく毎月十五日から二十五日の間に制限いたします。講演をお望みの方は、東京市外田端三五

金の星は新しい時代の童謡と童謡を普及するため講演部を設けました。野口雨情先生は童謡は沖野岩三郎先生、童謡は野口雨情先生が擔任されます。童謡なり童謡なり、御希望に應じて講師が出張いたします。但し、他に講師のある場合はお断りいたします。講演は先生方のお仕事の都合上、なるべく毎月十五日から二十五日の間に制限いたします。講演をお望みの方は、東京市外田端三五

金の星は新しい時代の童謡と童謡を普及するため講演部を設けました。野口雨情先生は童謡は沖野岩三郎先生、童謡は野口雨情先生が擔任されます。童謡なり童謡なり、御希望に應じて講師が出張いたします。但し、他に講師のある場合はお断りいたします。講演は先生方のお仕事の都合上、なるべく毎月十五日から二十五日の間に制限いたします。講演をお望みの方は、東京市外田端三五

金の星は新しい時代の童謡と童謡を普及するため講演部を設けました。野口雨情先生は童謡は沖野岩三郎先生、童謡は野口雨情先生が擔任されます。童謡なり童謡なり、御希望に應じて講師が出張いたします。但し、他に講師のある場合はお断りいたします。講演は先生方のお仕事の都合上、なるべく毎月十五日から二十五日の間に制限いたします。講演をお望みの方は、東京市外田端三五



通信

自由畫選評

山本鼎

△此月はさびしかった。ひどい出来事なかつたかばりに、冴えた繪もなかつた。一樣に貧弱だった。例によりて入選畫の寸評を記さう。

△田中より子さんの「サカナヤ」。より子さんは一年生位だらうか。眼はまだ幼稚だが、筆は活潑な方だ。ぐじ／＼して居ないので、水繪の具の色にも冴えがある。

△村岡君江さん、尋常三年生と書いてある。「中野さんと高橋さん」といふクレオンのスケッチは一寸可愛らしい。併しなせバツタを一面に青いクレオンで塗りつぶしたのですか。おの人物の寫生にあんなバツタは、不要です。まるでそのために水の中にも居るやうです。

△大仁川清君の「光ちやん」といふ鉛筆スケッチは上手だ。たゞ顔子をつけるためにもつと面の觀察からやつていつてはしい。△岩崎君の大きな魚の寫生、ひげつこびりで、

ないのがい。髪、毛の描き方なぞ素朴でいい。此繪のうちでは、のあたりが上手に描いて居る。たゞ全體に調子がいい。濃淡を面の觀察からとらへて描いて居る。調子をつけるからには、
△渡邊恒彦君の「うちのグアイオリン」は一見平凡のやうだが、プロポーションや、調子を極く落着いて見、穩當に描寫してあるのを賞しとする。
△石山正治君の植木の寫生は植木の鉢がよくかけて居る。いけないのは、サボテンの、を引立てようとして試みた濃いバツタの線だ。花は一向引立たず、たゞそのまゝのりがきたなくなつて居るにすぎない。植木鉢の影の紫色も不調和だ。もつとよく實物の色々々照して見て、それから描きはじめる事です。

幼年詩選後

若山牧水

△推薦にした山口克己君の歌は、ほんとに男の子らしい強さと清らかさを持つてゐて、歌だ。繰り返して讀んでみると、今にも眼の前にそのまつさをな涙がどぼんと落ちて来さうです。同じく孝野千代さんの「鯉子屋さん」も面白い。お天氣のいい日に鯉子屋さんが通る。鯉子や鯉子と呼ぶ聲が天までも通りさうだといふ。これも力に満ちた誇らかな歌でした。

△一寸したオチ（落ち）と書きます。軽いシヤかしく、響く。思ふほど思ふほど、どろどろと、やうな感じがします。此の作を、寶玉の△岡好一さんの「有馬さん」といふ作です。おとなしやかな有馬さんの姿が實によく書けてゐます。その有馬さんは今はゐないが、どうしてゐるだらうと思ふさびしい氣持が讀む者の胸をうちます。これも本當にいい作です。

△昨日の夕方、これも垂見校の作ですが、垂見校で指導の先生がしつかりしてをられると見えて、これもいい、綴りです。この作なども、夕方から夜にかけての美しい森の景色が畫を見るやうに書けてゐます。中の童話がよく出来たから、それで引き立つてゐるのです。

△日向なな子さんの「ある朝」は大層長いので半頁しか出さなかつたのは残念です。しかし半分だけでも、嵐のあとと光景は、よくわかります。これもいい作です。

△日向も、子さんの「おばあさんの家に行つた時」は感動を興へます。どの言葉も生きてゐて、ひし／＼胸に迫つて来ます。此の作者の御幸福を祈らずにはゐられない氣がします。

△大塚好之さんの「馬」は少しゴゴチない處があるが、その時の光景はよく書けてゐます。(い)作を書かうとあせつてはいけません。却つて巧く書けてゐます。

△若柳校の生徒さんの作は田舎の子まるだしで(少しも無理ななさがなく)いい氣持がします。お百姓の言葉を聞くやうな懐かしい氣がします。でも面白いものでしたが紙面がないのでみんな出せず譯に行かないので吉田さんの「犬」だけをのせました。といつてがつかりしてはいけません。

新しく出た本

九二

●廣い世界

エザレル原作、前澤古雲氏譯。童話集は澤山に出版されてゐますが、童話だけでは満足の出來ない年齢に達してゐる少年少女の讀物が今の日本には缺乏してゐます。かういふ時に當つて精華畫院の世界少年文學名作集は最も立派な使命をはたしてゐます。第廿一冊目として發行になつた「廣い世界」はアメリカの女流作家エリザベス・エザレルといふ人の作で各國の少年少女に廣く讀まれてゐる有名な本です。宗教的な嚴肅な物語りですから少年少女の美かな心に強いひびきを與へるに相違ありません。美順な、そして信念の深い一人の少女が、遂に氣づかして多くの人達を感化して行く、美しい物語りです。(四六判箱入六三九頁、定價二圓五十錢、東京牛込津久土町六、精華書院發行、振替東京四三六六番)

◆童話・民謡詩選集

(福田正夫氏、井上康文氏共編) 先きに「童話・民謡・詩のつくり」を著して非常な好評だつたので、その姉妹編として此の本が發行になりました。作り方を讀んだ人々には最もよい参考書です。現代詩人の作風を出来るだけ細く別けてその代表作を分類して集めてありますから、研究者には非常に便宜な本です。(每半頁判箱入五〇七頁、定價一圓八十錢、東京神田區神保町大前發行、振替東京四三六六番)

◆手紙の雲雀のやうに

(小林花鹿氏著) 童話が近來非常に盛んになつたので、それについて澤山の本が出版になりました。この本もその一つです。初めて童話を作らうといふ人のために、よく解りやすく童話について説明してあります。(每半頁判箱入二四頁、特價九十錢、東京神田小川町、博善堂發行、和聲東京二五六六番)

△綴方掲載外佳作

- △つばめと蛇 (不破義幹) △夏の日雨 (吉本辨治) △トランプ (東條久雄) △朝鮮館屋 (土屋留夫) △あらし (綴田ふじ子) △つばめ (藤田輝夫) △暗嘩 (曾宮春夫) △れすみ (田中久子) △帽子 (湯澤恒雄) △大遊び (三邑重雄) △蟲の聲 (戸村金吾) △十月の雨 (井上葵未夫) △朝顔 (中西直三) △兄さん (濱欽哉) △うさぎ (武良茂) △うちの犬 (鈴木次郎) △せきさい (鈴木信雄) △のらあそび (田宮元子) △學校へ来るまい (市村安次) △山あそび (赤松千歳) △草刈り (吉田五郎) △コナヒガカラノコト (青井久子) △をかしかつたこと (阿部早子) △朝の五分間 (北村國次) △小鯉の死 (田中正一) △火事 (山本重雄) △園子賣 (高橋久藏) △夜 (伊藤喜久代) △門前の記念碑 (毛利澄賢) △弘公の小うめ (津留次郎) △お宮のちりく (春野源次郎) △うちのこねこ (河田ワカ) △朝顔 (藤田千秋) △七夕とおぼん (山口しげ子) △正トトロカミナリ (山口詩晴) △御話 (堀正次) △夏の或る日 (丸山富高) △金の星を賣

綴方選評

選者

△二つとも単純な面白い歌だが、私は前を採る。前には無理がない。そして極めてぼんやり云つてしまつた中に自分のうちの庭に對する心持がよく出てゐる。後の方が複雑で面白さうではあるが、作者の心持におちつきのないのがよく解る。こた／＼してゐる。つまり無理があるのだ。無理のない、自然な歌を私は喜ぶ。

△今月はいゝ作が非常に多い月でした。悪い作の方が少くつて、いゝ作の方が多いのは實に愉快でした。それだけに選をするのにも一層骨が折れましたが、しかし、嬉しい月です。△賞の第一になつた津附二郎さんの「うちになつたためじろ」は特に光つてゐます。原稿用紙で四行ですが、三枚も四枚も書いたらより此の方がどんなにばつかり書けてゐるかかわかりません。幼い人か思つたまゝを書いたものに

應いますが御希望に添ひ兼ねますからどうぞ
悪しからず。それから先月號も今月號も表紙
や口繪を大御持統から御賞め下さいまして有
難う御座います。今後はますます一生懸命に
描きます。御禮のつもりで。

金の星出版部の消息

▲第一回の出版は印刷所の都合で豫定よりも
少し後れました。そのために發送が後れて
皆様にお氣の毒をいたしました。しかし、
お蔭様で曲集も童話讀本の方も非常な好
景氣で、毎日注文に追はれてなるやうな有
様でありますので、出版部の者一同大元氣
で活動いたしてまいります。

編輯室より

▲もう本年もあと一號だけ出すとおしよりに



りよだ者

▼暑い暑い夏も去つて月をめぐるとなりま
した。記者様、お慶りはございませぬか。今
まであまり暑かつたので少し怠けました。記
者様！お小言をいばないで下さい。その代り
これからどしどし、投書をいたします。びつ
くりなすつてはいけませんよ。……僕は衰
前のお祈りの時きつとかう神様に申します。
「金の星」がますます輝いて行くやうに……
▼記者先生！御無事ですか。僕は今月より
新愛読者です。どうぞよろしく。僕の組では
「金の星」がよいが、「金の船」がよいがとい
ふ話が出ました時に、僕が、「先生！『金の星』
がよいです。」といふと竹んが、「それがよい
です！」と云つたので、毎月「金の星」を
とることにしました。どうぞ先生！努力して
下さい。長野 丸山富高

なりませんが、實に一年の早いことを思ひます
編輯なしてまいりますと、一年が二月か三月か
ないうちな気がします。
▲もう今から新年號の計畫をやつてをりま
す。今度の新年號はスゴイものを出しますぞ。
皆さんを驚かせますぞ。長編物語りの「父戀
し」と持さんの大喝采のうちに、十二月號で
一とまづおしまひにいたします。しかし、あ
の悲しいお話はあれだけおしまひになるの
ではありません。伊吹子と明次と、それから
尋ねるお父様の商造との物語り此の後
になつていよ／＼面白く、また悲しくなるの
です。それはすぐ一冊の本にして出します
から。その時にあとの物語を全部そへて出版
いたします。大正十二年の一月には此の本が
皆様の手に届くやうに、もう準備してをり
まことにいたします。

井昇平) △星 (飯田正充) △僕の近所 (嶋増
公誠) △坊や (鈴木信雄) △唱歌を唄ふ子 (高
木しげ子) △Dポイントチヤリン (雨宮八重子)
△カバン (鳥喜一) △レベリスを着た母 (廣
谷珠枝) △水さし (上村賢三) △我が徳光神
社 (西村雨次) △海岸 (同人) △霧 (同人) △
空電車 (谷戸吉之助) △妹 (山中英三) △松
局 (山中鶴修) △ケンちゃん (高田キヨエ)
△花子さん (城井安子)

おこごわり

今月は募集童話と童話の選を紙面の都合で止
むを得ず一回だけお休みにして次號と一しよ
に選をいたすことになりました。投稿なすつ
た皆様にお詫言いたしました。 (記者)

金の星誌友

▲金の星誌友 ○埼玉 新井實造様 ○北海
道 鶴澤しげ子様 ○東京府 富樫誠一様 ○兵庫
前田修様 ○東京 川尻東次様 ○豊橋 梅村登美
子様 ○名古屋 宮島鈴枝様 ○東京 中島眞三
様 ○秋田 高橋トヨ様 ○長野 新井政久様 ○
大阪 都外川淳様 ○千葉 安達豊様 ○北海道
喜川宗一様 ○東京 小井吳勝様 ○東京 小
宮久子様 ○熊本 米満孝明様 ○東京 観山
じ様 ○横濱 窪田千秋様 ○神戸 高橋精三様
○東京 堀江秀子様 ○廣島 高塚正規様 ○入
阪 小島純様 ○新潟 太田三郎様 ○東京 濱
田多雄様 ○三重 横山さゆり様 ○西宮真
一様 ○大分 根津流様 ○北海道 宮森文雄様
○愛知 出村孝雄様 ○長野 御澤とよ様 ○茨
城 藤島勇雄様 ○北海道 脇山徳男様 ○愛媛 富
田茂寛文様 ○愛知 大池進郎様 ○北海道 山
口トヨ子様 ○秋田 東藤千代子様 (以下省略)

力な私共の爲に格別の御援助をお願ひ致します。すつかり寒くなりました。皆様の御健康を祈ります。(東京 江口達一郎)

▼私は某校の一訓導でありましたが、今度貴社から「童話讀本」が出版される事を知り非常に喜んであります。これまでの讀本は私どもも数へてなり乍らその無味乾燥な事にあきあきしてあります。この時にあたつて貴社がそつせんして此の様な精辦な御計畫をなされたといふ事は流石は「金の星」だと感服いたしました。私も早速に注文いたしましたから宜しくお願ひいたします。(信州 山崎生)

▼私は今度「金の星」の誌友になりました。どうぞ諸先生並に誌友諸君、お見知りおき下さい。私は一生をこの純真なる「金の星」の誌友として暮したいのです。就ては記者様に御尋ね致します。誌友は大人になつて入つても構ひませんか。私は童話を作論するの何よりの楽しみにしてあります。これからは何層努力して先生方のお目に止るやうな優れた童話を作らうと心懸けてゐます。(東京府下 桑原晚秋)

▼誌友は大人の方でも一向差支へありませんし、お申込み下さる事を歓迎します。

▼賞金をいたゞき有難うございました。これ程長らく「金の星」の讀者となる事が出来ます。私は以後、投書を以前の様にさせていただきます。田舎には毎日カナ／＼脚が鳴き通してゐます。今私が野中道をつつり歩いてゐます。何となく秋らしくなりました。(京都 鈴木仙三)

▼私は創刊號から愛讀してゐます。「金の星」になりました。同族です。弟も妹も熱心な「金の星」のお友達です。(臺北 下司榮)

▼近頃は大分しよきよくなりました。皆様にはおかげもありませぬが、私も無事につとめて居ります。此の間は大へんむりを申しましてすみませんでした。きれいな「金の星」をさつそく送つて下されば誠に有難うございまして。(大阪 小山イリ子)

▼記者先生！僕は歴史のお話が大好きです。もつとたくさん出して下さい。

▲富山縣 大場友次

▲あれ、よいの明星光つてる 金の星

▲先生私九月號から「金の星」愛讀者の一人に入れて下さい。「金の星」は大へんに爲にもなり面白い本です。父母がほかのを買ひたい時も、私はどうも「金の星」が一番好きですから、いつも「金の星」を買つて來るからです。(朝鮮 水落宮英子)

▼記者様にお願ひします。お解と云ひませうが、ブリーチが投函するなんて、けれども私



紅の橋 (橋本武蔵作) 三つと町のちつめ(1)と町のち

は(マン)履草い赤(3) シタ たじか論鼓太(2) シタタタタタタ

のハートは眞實に無邪氣な多くの子供達を愛することが出来ます。私は絶えず思ひ出を呼んで居ります。(よしな)

▼改題されてからすぐ近所の本屋に行つて「金の星」と見くらべて見ましたが、とうとう岡本先生の表紙と口繪、三宅先生の「家なき子」 沖野先生の「父戀し」等「金の星」でなければと見られないものです。私はいつも「金の星」が「金の星」よりもすべての點に於て優つて居ることを喜びます。どうかこれから益々力をいれて「金の星」を撃破される事を祈ります。(熊本 田中正一)

▼記者様、近頃童話の遊戯が盛んに行はれてゐますが何か童話遊戯の書いてある本はないでせうか。ありましたら御手数数年發行所と定價をお教へ下さい。(東京 平能敏子)

▼「童話と遊戯」と云ふのが出ました。定價は五拾錢で發行所は神田區小川町敬文館 振替東京一二三三六です。(記者)

▼記者様、私は「金の星」の献身的な努力を感謝します。日本の國の隅々まで「金の星」が光らずには居りません。私もこの秋には是非一度子供等と一緒に記者様をお迎へしたいと思ひます。手賀沼の秋はこれからです。(千葉 染谷秋月)

▼記者様！今度誌友になりました長谷川でる子は理由がございまして、遠くへ行かなくてはならぬので、私に姉で秋子と申すのですが、かばつて誌友になりました。これからは長く誌友にして戴くつもりです。妹よりも

▼私は創刊號から愛讀してゐます。「金の星」になりました。同族です。弟も妹も熱心な「金の星」のお友達です。(臺北 下司榮)

▼近頃は大分しよきよくなりました。皆様にはおかげもありませぬが、私も無事につとめて居ります。此の間は大へんむりを申しましてすみませんでした。きれいな「金の星」をさつそく送つて下されば誠に有難うございまして。(大阪 小山イリ子)

▼記者先生！僕は歴史のお話が大好きです。もつとたくさん出して下さい。

▲富山縣 大場友次

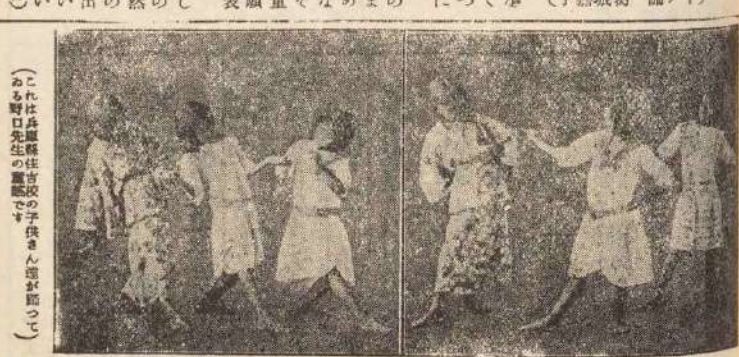
▲あれ、よいの明星光つてる 金の星

▲先生私九月號から「金の星」愛讀者の一人に入れて下さい。「金の星」は大へんに爲にもなり面白い本です。父母がほかのを買ひたい時も、私はどうも「金の星」が一番好きですから、いつも「金の星」を買つて來るからです。(朝鮮 水落宮英子)

▼記者様にお願ひします。お解と云ひませうが、ブリーチが投函するなんて、けれども私



(子嘉城葛 蘭ノ下)



も子のこ れ渡も子のあ(4) れ渡くよ仲 れ渡

々手 ぞい高橋の虹(5) れ渡てい引

(これは兵庫縣住吉区の子供さん達が踊つてゐる野口先生の舞臺です)

懸賞創作募集

自由綴

◆少年少女の創作◆
 山本 鼎先生選
 若山 牧水先生選
 編輯部選

〔意注〕

課題は何でもかまいません。諸君の目々見たり、感じたりしたことや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は、學校や學年(または住所と年齢)ともにおとさないやうにしてください。用紙は自由書はなるだけ重畳紙に、幼年詩や綴方はなるだけ原稿用紙(または半紙)に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の賞品を差上げます。次號締切は十月廿八日(その以後は次號へ廻る)發表は十一月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の船社。

童童

◆一般讀者の創作◆
 齋藤佐次郎先生選
 野口雨情先生選

〔意注〕

童話は二十字詰二百行以内、童謡は十五行以内、優秀な作品は「推選」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして、入選の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。



難破船

「お母アさま……」
 明次は松原の所から、大きな聲で呼びました。伊吹子は砂丘の上に駆け登つて、海の方を眺めました。けれども、おツ母さんの影も見えず何の返事もありませんでした。
 「お母アさま……」
 伊吹子と明次とはまた聲を揃へて呼びました。すると右の方の松原の所から、

定價 壹冊 參拾錢 送料壹錢
 三ヶ月分三冊(送料共)九拾錢
 半年分六冊(送料共)壹圓八拾錢
 壹ヶ年分十二冊(送料共)參圓六十錢
 但し四月號九月號は特別號で廿五錢新年號は四十錢ですから、御注文の際はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい
 振替口座東京五九五六六番

〔送〕御注文は必ず前金で御拂込み下さい
 〔送〕送金は振替が一番便利で御座います
 〔送〕切手代用は(零錢切手)一割増しです
 〔注〕第何巻第何號よりと書いてください
 〔意〕住所姓名は必ず書き添えてください
 廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十一年十月六日印刷納本(毎月一回)
 大正十一年七月一日發行(一日發行)

東京市外田端三百五十一番地
 編輯兼發行人 齋藤 佐次郎
 印刷人 大橋 光吉
 東京市小石川久堅町百八番地
 印刷所 株式會社博文館印刷所
 東京市外田端三百五十一番地
 發行所 金の船社
 振替口座東京五九五六六番
 電話小石川五三三八七番

「おうーい、明坊！ 伊吹ちゃん！ 来て御覽早く……早く……」と言ひながら漁夫の時也が手招きをしました。

「時也さんちや、時也さんちや。」と云つた明次は、

「はアーい、今行きます……」と呼び返しました。

「何でせう？」と言ひながら、伊吹子は明次と肩を並べて砂の上を走りました。

二人が凡そ三千間ばかりも走つたと思ふと、時也は、

「明坊、お母アさまは？」と大きな聲で言ひました。

「お母ア様は居ないんだよ。何所へ行つたのか知ら？」と思つて、尋ねに来ただよ。」

「さうか、それは困つたなア、明坊でも伊吹ちゃんでも誰でも宜いから、家へ行つて、お母アさまを呼んで来てくれないか。」

「どうしたの？ どんな用事なの？」

明次が返事をしないうち、伊吹子は不安な顔をして問ひました。

「僕に言つてくれても宜いだらう！ ね、時也さん。」

明次も眼を圓くしながら言ひました。

時也は、ちつと二人の顔を眺めてゐたが、思ひ切つたといふやうに、

「外でもないがネ、あんた方は牛若丸の舟の事を知つてるかい。」と言ひました。

「えッ？ 牛若丸の舟が何うしたの？」

「牛若丸のお舟は何所に來てゐますの？」

明次と伊吹子とは同時に、さう云ひながら、時也の兩の袖に縋りました。

「私は今朝、三輪崎の孔島の方へ舟で行つたのぢやが、其の歸りがけに、あの御手洗の巖の向ふ側に毀れた舟が、浮いたり沈んだりしてるのを見付けたんぢ

「やよ。」時也は其所まで言つて、其の後を言ひ悪さうにしてゐました。

「其の毀れた舟が、牛若丸の舟だつたのですか。」

「うん、さうぢや。私はそれを見て吃驚したが、早速其所へ舟を漕ぎよせて、綱を縛りつけて御手洗の濱まで引張つて來たんぢや。もう牛若丸の繪は餘程剥げては居るが、どうしても尙造さんの舟に違ひない。あの舟卸しの時には、私も手傳つてあげたんぢやから、よく知つて居る……」

時也は氣の毒さうに言ひました。それを聞いた時、明次と伊吹子とは、物も言はずに濱の細路をどん／＼と御手洗の方へ駆け出しました。

「おい／＼、明坊。私も一緒に行くから。」

時也は呼びかけながら二人の後について走りました。

「一緒に來て下さい、お舟のある所を教へて下さい……」

伊吹子は振返り振返り言ひました。間もなく時也は二人に追いつきました。そして、五六町餘りもあると思はれる松原の細路を、一生懸命に走りました。路が判らなくなると、砂の上を無闇に走りました。小い溪の流れを跳び越えたり、眞葛原に駆け込んで、足に葛を引つけて轉んだり、葦の繁つた泥の中に踏込んで土に下駄を奪られたり、草原に寝てゐた眞黒い牛に脅かされたりしながら、やつと御手洗の濱まで來てみると、浪打際に五六人の男と女が集つて、毀れた舟を見てゐました。

「伊吹ちゃん、あれだ／＼、あの舟だ。」と言ひながら、明次は其の側へ駆け寄り、まずと今まで其所に蹲踞してゐた人達は皆な驚いたやうに立ち上りました。

「それよ。其のお舟に違ひないワヨ。まアどうしたんでせう？」

伊吹子は最う眼に涙を一杯泛べてゐました。

時也は舟の軸（き）の所を、ぐツと引張りながら、
 「これは商造さんの舟ぢやらうか。どうでせう、あなた方は、さう思ひませんか。」と言ひました。すると一人の六十近い爺さんは、頭を傾けて舟の底の方を眺めながら、

「私もさう思ふ。私は商造さんが此の舟を造つた時、あの王子ヶ濱で見た事がある。」と言ひました。

「此の牛若丸の畫が證據ぢや。私も商造どんがこれを描くのを見たよ。」

さう言つたのは、四十恰好のよく肥えた男でした。

伊吹子と明次とは、何にも言はないで、ちツと毀れた舟を見てゐましたが、明次は其所に立つてゐる人達に對つて、

「昨晚、此の沖で、おうーい、おうーいッと呼ぶ聲が聞えなかつたですか。」と

問うてみました。すると一人の男が、

「聞いた〜。私は二度も三度も、表へ出てみたが、どうもそれは濱に近い所のやうぢやつた。」と言ひました。すると年の若い女が、

「此の舟に商造さんが乗つてゐたんぢやなからうか。」と言つてしまひました。

それを聞いた一同は、皆な一時に、明次と伊吹子との顔を見ました。

今まで黙つてゐた二人は、其の言葉を聞くと同時に、もう堪らなくなつて、わあーと聲をあげて泣き出しました。

舟の軸（き）に凭（た）れてゐた時也は、大きな聲を出して、

「おい、お鹿（か）さん。何を言ふんぢやい！ 商造さんの造つた舟であつても、商造さんが乗つてゐるに定（ま）つたもんかい。商造さんはロシアの浦鹽（うら）に居るんぢやよ。此の舟は何所かの港で他人に賣つたのかも知れないぢやないか。」と言つて、

其の若い女を叱りました。

「うん、さうぢや。高造さんが賣つたのかも知れん。昨晚おうーい、おうーいと言つて呼んだのは、あれは鯉魚釣に出た連中かも知れんよ。」と云つた爺さんは、明次と伊吹子との頭を兩手で撫てながら、

「泣くな、泣くな、心配する事は無い。お前達のお父様なら、こんな波の荒い御手洗の巖壁へ舟を寄せ付けはせぬ。これは屹度、此邊の海の様子を知らない人が乗つて來たに相違ない。」と優しい聲で慰めました。

其時谷合の方から、

「おうーい、難船があるといふのは其所か？」と呼んだ人があるので、皆は驚いて一時に聲のした方を振向くと、警部と巡査との白い着物が、青い芝生の上に見えました。

「あ！ お母ア様だ！」明次は叫びながら駆け出しました。

「お母ア様だワ。それから作爺さんも……」

伊吹子も然う云ひながら走りました。時也は谷の所から出て來た四人の姿を不思議さうに眺めてゐたが、作爺さんの顔を見ると、急ぎ足で、陸の方へ歩いて行きました。

一番前に立つてゐた巡査は、時也の顔を見ると直ぐ、

「あれか難破船は？」と言つて、舟の方を指さしました。

「えエ、あれでございます。私は今朝の五時半頃、あの巖陰で見つけたのでした。」時也は腰を屈めながら言ひました。

「さうか、舟の中に遺留品は無かつたか。」巡査の後にゐた警部は問ひました。

「何もあらう筈はありません。舟が倒まに引っくり覆つて居ましたから。」

「それを此所まで、君が引張つて来たんだネ？」
 「えエ、あの巖が危険でしたから、一旦沖の方へ出て、そして此所まで引いて
 来ましたのです。」と言つてゐる時、作爺さんと式江とは心配さうな顔をして、
 十四五間後れて警部の後について来ました。

「お母ア様、お父様の舟よ、あれは。」と言つて、明次はその袂に縋りました。

「本當よ、お父様のお描きになつた、牛若丸の畫のあるお舟よ！」

伊吹子は袖を顔に押當てながら小さい聲で言ひました。

「さうだつてネ、お父様のお舟が、何うして此所へ流れ着いたんでせう？」

式江は明次と伊吹子との首の所に兩の手を掛けながら言ひました。作爺さん
 は、

「まさか、商造どんは、あの巖壁へ舟を漕ぎつけはせんよ。心配なさるな。こ

れには何うも理由がありさうぢや。まあ、明坊も伊吹ちゃんも、もう泣く
 な、よ、泣くもんぢやない。」と言ひながら浪打際へ歩いて行きました。

舟の傍に立つてゐた警部は、式江の方を振り返りながら、

「奥様、これはあなたの御主人の舟に相違ありませんか。」と尋ねました。

近寄つて、暫くそれを見詰めてゐた式江は、涙をハラ／＼零しながら、

「はい、其舟に相違ありません。」と言ひました。

「何か證據がありますか。」

「はい、その牛若丸の繪は、主人が描いた繪に相違ありません。」

「では、今朝の拾得品を包んであつた風呂敷に見覚えがあり、此の舟が、お家
 の舟だとすれば、もう疑ふ餘地はありませんから、御主人が遭難なすつたもの
 として、相當の處置をしなければなりません。如何いたします？ 海女でも

備つて、此の海岸を一應探らせませうか。」

警部も氣の毒さうに、聲を顫はせながら言ひました。

「では、どうぞ宜しく願ひます……」

式江はそれだけ言ひかねて、伊吹子と明次の肩を抱へて、砂の上に泣倒れてしまひました。作爺さんは、時也の方を見ながら、

「おい、時也さん、私はこれから、東の方をずっと宇久井の方まで海邊を見廻つて来るから、あんたは私と反對に西の方を見て来ておくれ。」と言ひました。それを聞いた巡査は、周圍に立つてゐた人達に對つて、

「では、君達は二組に分れて、西と東との海岸を注意して調べてくれ給へ。海女を備ふ事は僕が引受けるから。」と申しました。

「うん、さうしてくれ給へ。それでは君達二人に頼むよ。」

警部は作爺さんと時也とを一緒に見て、一寸點頭きました。

「宜しうございいます。」

「では、行つて参ります。」

作爺さんと時也とは兩方へ別れながら、其所に居た七八人の人達を三四人づつ伴れて行きました。巡査も海女を備ひに行く爲に、細い山路を急いで登つて行きました。

「どうした事だらう？　こんな小さな舟で浦鹽あたりから漕いで来るはずはなし……」

警部は獨語のやうに言ひながら、海の方を眺めてゐると、沖の方から一艘の漁船が、元氣よく岸の方へ漕いで来るのが眼に入りました。

船からは、時々手拭のやうなものを打振つて岸の方へ合圖をするやうでした。

「奥様、あれは何の合圖でせう？」警部は式江の方を見ながら言ひました。

「えエ、何か言つてるやうでございますネ。」と言つて式江は、耳に手を添へて

漁夫の聲を聞取らうとしました。

舟は段々近づきました。漁夫の聲が、囁けながら聞取れました。

「おうーい、溺れて……あつたぞ……」

「おうーい、溺れて死んだ……あつたぞ……」

「おうーい、溺れて死んだ人の……あつたぞ……」

それを聞いた警部は、伸上りながら、

「死體だ、死體が見つかつたのだ！」と叫びました。

「え！ あの死體が……」式江は思はず起ち上つて海の方を見ました。其時舟

は最う岸から一町ばかりの所へ來てゐました。

「何だい？ 何が見つかつたんだい？」

警部の聲は随分大きな聲でした。

「死骸ぢや！ 男の死骸ぢや！」舳に立つて居る若い男は叫びました。

「何所で見つけた？」

「二十町ばかり沖で……」

「此の舟に乗つて居た男らしいか。」

「いゝえ、舟に乗るやうな男ぢや無いでせう！」

漁夫と警部との問答を、一語々々胸に釘打たるゝやうな思ひで聞いてゐた式

江は、(舟に乗るやうな男ぢや無い)といふ最後の言葉を聞いた時、ほつと安心

したやうに思ひながら、首を伸して見ると、舟の中には洋服を着た男の死體が

横はつてゐました。

導指生先風晴田吉 威權の界八尺

新 最 録義講信通八尺

呈進第次込申本見容内及則會・圓貳金費會・了修月ヶ三

吉田晴風先生著

新刊尺八樂譜

一冊三十錢均一

如何なる初心者も読んですぐわかる
尺八の理想的獨習書——黒髪、六段、
千鳥等の曲を自由に演奏出来るまで
講義す——三曲合奏法はレコードを
應用して指導す。

- 宮城道雄氏作曲
 - 尺八三部 合奏 よろこび
 - 尺八二部 合奏 ひぐらし(童の風)
 - 尺八 合奏 秋の鶯
 - 尺八 合奏 初

- 古 曲
 - 黒八代獅子聲
 - 八代獅子聲
 - 六代獅子聲
 - 千代獅子聲
 - 設獅子聲
 - 鳥の音
 - 湯の音
 - 茶末頭

本居長世先生作曲	
——新民謡——	
1	さすらひの風の歌
2	夕潮
3	豊作
4	別後
5	關の夕ざれ
6	白月
7	咲いた
8	砧の音

東 京 市 外 白 眉 出 版 社 振 替 五 四 五 八 番 東 京 目 黒 四 六 八

— 新 民 謡 —

舟が岸に着いた時、一人の漁夫は舟縁から、どすん！と濱へ跳び下りて、
「旦那、丁度よい所へお出て下さいました。私共は今朝風く十人連で、三艘の
船に乗つて沖へ出かけたんですが、こんな者を見つけたので、取敢へず運んで
来ました。」と言つて、警部の方へ丁寧な頭を下げました。
「さうか、御苦勞だつた。」
と言ふや否や、警部は、舟の中へはひつて行きました。その時、漁夫は式江の
方を見て、
「呀、商造さんの妻さんぢやないかい？」と言ひました。
「はい、左様でございます。あの舟の中の人は？」
式江はワク／＼と顔へながらたづねました。伊吹子と明次は、眞蒼くなつて
おツ母さんの兩の袖に縫つてゐました。

大正十一年六月十三日
大正十一年七月六日
發行部 第一四二番

東京金の船社發行

寒さが参りました

冬の御支度は、品のよい値の安ひ買ひ、心地の良、三越呉服店に限ります、殊に本年は、各種の實用品や流行物を、非常に澤山取揃へて御座います

三越マーケツト 木箱類雜貨 食料品
兼所用具洋服靴子等毎日非常し好評であります

- ◆子供洋服陳列(十月十九日)
 - ◆結婚衣裳陳列(十一月一日)
 - ◆お召さ小紋陳列(十一月二日)
 - ◆新製丸帯陳列(十一月三日)
 - ◆家庭作品展覽會(十一月四日)
 - ◆半襟帯場陳列(十一月五日)
 - ◆寄切栴安反物賣出(十一月六日)
 - ◆贈答新作展覽會(十一月七日)
- 定休日……十月二十五日……十一月十日……十一月二十五日……

東京

三越呉服店

